

太 玄

会報 第77号

令和5年4月

太 玄 会

太 玄（会報77号） 目 次

一、あいさつ

石川 流 芳 前 会 長	1
西 村 東 軒 新 会 長	2
宮 負 丁 香 前 理 事 長	3
伊 場 英 白 新 理 事 長	4
小 出 聖 州 前 事 務 局 長	5
下 谷 蘊 雪 新 事 務 局 長	6

二、第62回太玄会書展

日 程 表	7
役員及び各部部長	7
入賞・入選者	8
会場風景	11
受賞者の言葉	12

三、第63回太玄会書展

日 程 表	18
役員及び各部部長	18
入賞・入選者	19
会場・授賞式風景	22
謝 辞	23
受賞者の言葉	24
四、令和3年度総会	
資料掲載	31

五、令和4年度総会

資料掲載	40
------	----

六、太玄会所属団体のここ2年の活動

(令和2年4月～令和3年4月)	49
-----------------	----

(令和3年5月～令和4年4月)	
-----------------	--

七、太玄会所属団体の活動予定(2年分)

(令和3年5月～令和4年4月)	61
-----------------	----

(令和4年5月～令和5年4月)	
-----------------	--

八、田中鳳柳先生追悼特集

追悼文

金 丸 鬼 山	63
小 林 紫 雲	65
伊 藤 柳 絮	65
小 宮 柳 岱	66

九、特 集

浅 香 麗 芳	71
柏 原 桂 雪	72
時 田 大 祥	72
吉 村 清 志	74
尾 崎 清 爽	76
小 林 桂 葉	77
三 好 凌 香	78
山 口 杏 園	79
大 木 曉 峰	80

編集後記 広報部



和と敬の大切さを思う

前会長 石川 流芳

歳月の流れは時として、速いとも遅いとも思えるが、平成三十一年の創立六十周年記念祝賀会を契機として、太玄会は新しい一歩を踏み出したと言えよう。役員人事では、若い人材が多く登用され以前にも増して活発な意見、企画が生まれている。

令和三年一月、世は正にコロナ禍に揺れる中、第六十二回太玄会書展の開催に踏み切った。コロナ対策の徹底を計り、会員の協力のもと運営委員が連日受付けを努めるなど、無事開催出来たことは、長い歴史の中でも厳しくも有意義な経験であったように思う。会員各位に心からの御礼を申し上げる次第。

更に特筆すべきは、念願であった太玄会の法人化である。今後太玄会が対外的に活動する為には会の信用が大切であり、信用度を高める為には法人化は必要不可欠と考える。長く準備をし、再三役員会で討議を重ねて、令和二年度の総会に於て承認いただき、安堵している。

今後世の中、コロナが収束に向かったとしてもすべてに於て、大きな改革、変化となること必定。書道界への影響もなしとは言えない。

太玄会は、長い歴史の上にたつて、十五社中、ともに古典の重要性を説き、各社中の書風を更に磨き、競い合っていきたいと願う。和と敬が会としての合言葉。会員の叡知を結集して、書道界の発展に寄与し、太玄会の更なる躍進をめざして、ともに鋭意努力していく決意である。



新会長に着任して

新会長 西村 東 軒

この度太玄会の会長に指名され大変恐縮いたしております。累々たる歴史、錚々たる歴代会長の顔ぶれを鑑みると、光栄であると同時に重い責任を感じざるを得ません。

就任にあたりまずは体調不良のなか大任を果たされた石川流芳前会長に敬意を表したいと思います。

また、今回退任された宮負丁香前理事長、そして小出聖州前事務局長におかれましては在任中のコロナウイルス感染拡大下での展覧会開催、念願であった太玄会の一般社団法人化等々の複雑な事務運営を任され最前線で指揮を執って頂きました。ご苦勞もさぞかし多かったと推察されます。誠に有難うございました。

さて、就任後の私にとって最優先課題は、伊場英白新理事長と共に皆様に対して将来へのビジョンを具体的にお示しすることだと思っています。次世代を担ってもらう若手の育成については急務であると考えますが、全体の力の底上げ、コロナ下でのイベント開催、SNSなどの媒体を積極的活用、等々多岐にわたっております。会員の皆様のご意見・ご発想を事務局に結集し、検討・実施という流れを更に強化して進めてまいりたいと思います。

前任者の発案で新しく編成される事務局に電算部が新設されます。今まで全体像がつかみにくかった太玄会の動向や意見の吸い上げなどもホームページの積極活用により容易になると期待いたします。会員の皆様お一人お一人が今まで以上に太玄会と係わって頂ければ太玄の明るい未来が開けると確信しています。太玄会に育てられた恩に報いるため微力ではございますが精一杯努力いたしますのでご協力の程お願い申し上げます。



第六十三回太玄会書展を終えて

前理事長 宮 負 丁 香

新型コロナウイルス感染症拡大を巡る緊急事態宣言の発令により、第六十三回太玄会書展も事業の大幅変更を余儀なくされました。

昨年十二月十三日の書類搬入の後の忘年会を始めとし、解説会、席上揮毫、授賞式、受賞祝賀懇親会等と書展に伴う行事のことごとくが中止に追い込まれました。第六十三回展の出品者数もこのコロナ禍の中減少傾向であります。今回も新設した高校生の部においては各社中のご尽力により多くの高校生が出品いたしました。このことは太玄会の将来を考えますと大きな意義を持つことと思います。展覧会も当初の計画から大きく変更せざるをえなくなりましたが、会員の皆様のご協力のお陰で大過なく無事に終了することが出来ました。改めてお礼申し上げます。

又、昨年度より一般社団法人太玄会として新たな出発をすることにより四月の総会で承認されました。内規も新たに整い役員の

名称も若干変わり、六十三年の歴史ある太玄会が法人となり改めて真価を問われる団体となります。

日本の伝統文化を継承しながら太玄会を盛り上げるよう会員相互の切磋琢磨、更なる研鑽が期待される時期に来ているのではないのでしょうか。第六十四回展に向けて良作を出品されることを望みます。



第63回展を終え 新理事長として

新理事長 伊場 英白

第63回太玄会書展はコロナ禍の中でしたが充分な対応策を講じながら無事に開催することができました。役員2名と将来太玄会を担うであろう中堅作家3名による大作を出陳し、第1室の壁面も大きく変化しております。展覧会では密を避けるために団体での鑑賞はご遠慮いただき、会場での作品解説会・席上揮毫・講演会・懇親会の中止等々、企画の制約をもうけながらも開催し、鑑賞者は多くを入れないという些か違和感を覚え乍らの開催でしたが現況下では開催できたことだけでも喜ぶべきことでした。

今後は更に時代や環境に即した開催・鑑賞の方法を考えていかなければと痛感しております。展覧会の開催に際しては役員をはじめ出品者そして来館者様のご理解ご協力に感謝申し上げます。

展覧会にかかわる全般について考えると先ずは役員および公募出品者数の微減については、やや下げ止まりの感ありと雖も

注視し続けなければならない大切な事柄といえるでしょう。

また、併催の第6回学生選抜展の出品も高校生を含め400点を数え軌道に乗ってきています。この若い学生たちが太玄会の将来発展の礎となってくれる存在であることを期待してやみません。

尚、紙面をお借りしてご挨拶申し上げます。

この度の役員改選で理事長を仰せつかりましたが、もとより浅学非才の身ですので皆様方のご協力を戴きたく何卒よろしくお願い申し上げます。西村東軒新会長と共に、会の運営に微力ではありますが全力を尽くす所存です。

一般社団法人太玄会は15の会派で構成された集合団体です。よく主義主張が違ふといいますが、書表現の上達、書を愛好するという点で目指すは一緒です。お互いを尊重しあつて会の発展にご協力をお願い致します。



令和4年度社員総会を終えて

前事務局長 小出 聖州

4月17日(日)、昨年に引き続き総会を開催する事が出来た。中止せざるを得なかった2年前から、コロナ禍の中で最善の策を模索し続けたこの1年を振り返ると感慨深い思いが去来せざるを得ない。

第62・63回太玄会書展の開催に何故こだわったのか、そのことに少し触れてみたい。令和2年3月以降、軒並み書道展は中止のやむなきに至った。先の目標を見失って気落ちした方もいただろうし、この機会に臨書に専念して足下を固め直そうと肯定的に考えた方もいよう。いずれの場合で有っても、『今日ここにこうして立っていることが出来るのは決して自分一人の力ではなく、多くの方の支えが有ったからだ』と気付かされた点では同じ想いであつたろうと思う。では何をすべきなのか。結局字書きとして自分の道に専念することこそが肝要であるという結論に行き着くだろう。とはいえ、太玄会書展の開催が故のコロナ感染は絶対に防がなければならなかった。この命題をクリ

アすべく多くの方の英智をお借り出来たこと、また急な方針の変更に次ぐ変更を足並み一つ乱さずに完遂出来たことには深く感謝申し上げたい。

結果として東京都美術館の壁面に飾られた作品は1点では有ったが、その1点の陰に存在した多くの作品のことを思うとき、零と1の差は無限大であると言わざるを得ず、その差こそ開催した意義であつた。

また、昨年度の総会は、太玄会の歴史の変換点ともいえる総会でもあつた。『一般社団法人太玄会』というのがこの総会以後の正式名称ではあるが、冠に一般社団法人が付くと付かないとでは、見た目には何のの違いもない。違いの差は想いの差である。書を通して我々は社会貢献を果たしていくのだという意志を明確に示したということであつて、本当の真価は今後の活動に問われよう。新たな歩みを確固たる歩みにすべく共に努力を重ねていきたいものである。



事務局長に就任して

新事務局長 下谷 蕨雪

昨年の総会四月十八日から一般社団法人太玄会として一年目がスタートしました。

コロナ禍、今年も懇親会までは出来ませんでした。が、会員皆様と対面での総会に一般社団法人として初回の総会が迎えられ、議事もスムーズに承認された事にホッとしております。

さて、この度総会において事務局長の任を受けさせていただきました。

私が部長としての仕事をさせていただいた頃から、歴代の事務局長の活躍ぶりに触れ、行事・会議に対する準備、終了後の事務処理など、年間を通じ次年度の事まで視野に入れ、きめ細やかに働いている姿に頭が下がる思いでございました。

私が事務局長に籍を置くことは、荷が重く感じておりますが仕事はすでにスタートしております。歴代の先生方の姿を思い浮かべながら、まずは目の前の事から、皆様にご迷惑が掛からぬ様、私のペースで進めて行こうと思つて居ります。

次年度、太玄会書展は六十五回記念展となります。少しずつ準備に入っております。

皆様方のご意見に耳を傾けながら多くの方々にご出品いただき、又多くの方に足を運んでいただける魅力ある六十五回展になる様、事務局一同心を合わせて進めてまいります。

築き上げてきた一般社団法人太玄会がまた一歩成長するお手伝いをさせていただけることに感謝し、又会員皆様の更なるご協力を願っております。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

第62回 太玄会書展 [併催 第5回学生選抜展]

日程表

年月	31	7	8	9	19	20	21	22	23	24	25	26
曜	木	金	土	火	水	木	金	土	日	月	火	水
作業内容	搬入	会員賞選考	鑑別・審査	陳列	開会	開会	開会	開会	高校生授賞式及び昼食会	開会	授賞式	祝賀懇親会
時間	10:00～12:00	11:00～	11:00～	10:00～	9:30～17:30	9:30～17:30	9:30～17:30	9:30～17:30	9:30～17:30	9:30～17:30	9:30～17:30	9:30～14:00
会場	都美搬入・搬出室	都美審査室	〃	都美展示室	〃	〃	〃	〃	上野精養軒(中止)	都美展示室	上野精養軒(中止)	都美展示室
担当部	搬入・搬出部	審査事務部	〃	陳列部	会場当番	会場当番	〃	〃	渉外・接待部	〃	渉外・接待部	会場当番

役員及び各部部長

名誉顧問	梅原清山	理事・総務	石島廻山
常任顧問	福田丞洲	理事・総務	遠藤有翠
常任顧問	田中鳳柳	理事・総務	木全珠香
常任顧問	笠原聖雲	理事・総務	植木蒼穹
常任顧問	垣内楊石	理事・総務	鎌田龍祥
会長	石川流芳	理事・総務	中尾勝子
副会長	西村東軒	理事・総務	中田珪川
副会長	露野雅宣	監事	志村恵風
董事	鈴木映華	監事	小林紫雲
董事	瀧沢曲峰	會計部長	山口香葉
董事	小原天簫	事業部長	露野祐涯
董事	伊東玲翠	広報部長	荒井湧山
理事	高橋心行	渉外・接待部長	石井蕙園
理事	宮負丁香	図録部長	小林碧桃
副理事長	金丸鬼山	搬入・搬出部長	江原紫光
副理事長	伊場英白	審査事務部長	山村鳳羽
事務局長	小出聖州	陳列部長	伊藤慈恩
事務局長	江原見山	褒賞部長	小泉興起
事務局長	大場大幹	祝賀会部長	大河原由佳
事務局長	下谷蕪雪	学生部長	鳥越新芽
事務局長	飛田冲曠		
理事・運営委員	海野十方		

第62回 太玄会書展入賞・入選者 (五十音順)

理事の部

太玄大賞

浅香麗芳 柏原桂雪 時田大祥 吉村清志

審査会員の部

太玄賞

天寺雅良 尾崎清爽 小林まさ子 森 鶉石

全日本書道連盟賞

川名僊苑 倉持茜祥 妹尾敏子 備前 徹

会員の部

特別賞

大木操守 小俣柏翠 釜田 響 川井韶瑞

柳沢桑風

奨励賞

中島翠霽 原田兆祥 舛田白露 山田松陽

会員新人賞

相木小百合 小暮兆琳 鈴木光鶴 鈴木万深
田島由美子 手島萬峰 常田新葉 中元玉蘭

準会員の部

推選

藤田晶洋 細渕金杏 吉田庭鳳
荒井蓬月 石井白玲 菴澤御櫻 牛口仙桃
内田黄鳥 榎本華艶 大山堂以 方波見早子
鎌形美容 草間清晨 栗原紫翠 坂 智大
清水嶺花 莊保浩子 菅谷弘麗 鈴木美晃
高橋希兆 田中さち子 西村果仙 古澤双葉
宮澤溪翠 村上静竹

準推選

阿部 寛 石川芳泉 市川嘉恵 稻生妙子
上村高子 薄木逸醉 宇田川翠扇 江澤とし子
大河原佳奈 大坂八知枝 岡島寿石 掛川和光
岸 美津子 久保田溪堂 毛塚佳泉 古賀輝煌
国分滋潤 後藤詩織 児山九聲 斉藤光天
斉藤浄心 坂 栄華 佐藤響雅 佐藤蒼艶
仙石良子 高橋紅葩 高橋蒼功 高橋朗山
田嶋慎仙 玉村華堂 遠山陽江 内藤妙子
西方勇玆 西原彩華 根本恵和 長谷川綵月
日野 緑 日野出夏穂 平田光空 福塚光徳
藤平玉峰 藤原光水 増井紅翠 松原秋邨
松丸流雲 山田香雪 油井謙輝 吉本余榮
渡辺佳祥

公募の部

特選

荒井桃子	井内淑恵	石井梅香	岩間鶴巢
数本好慧	金丸華山	金子きみ代	川畑美風
栗本 暁	小林富子	櫻井慧醉	櫻田明道
佐藤 英	眞田星鳥	塩澤智加	清水享鶴
杉山香雨	杉山葉月	高柳浩美	長橋葉鶴
南雲鷺草	膝附桐穂	福本澄鮮	藤沢貞行
松本寛恵	村田定暁	森 千花	矢田貝恭子
横田亜矢子	吉田 愛	米澤志織	綿内良子

準特選

池田奈々恵	上村霽麗	瓜田余響	大井綾華
大山紫彩	岡田信来	小田順子	風間翠泉
片岡久美子	片山廣楓	加藤紅苑	川島遙青
川谷淳一	城所そら	木下正覚	熊谷 弘
倉持昌世	黒田真弓	小池礼凌	小池俊宇
小岩瑞季	小杉恵美子	小林ひな子	佐々木啓春
佐藤榮壽	佐鳥光浩	島本和樹	鈴木光濟
鈴木教子	高橋翠嶺	竹内百紀江	田中恵美
田中春曄	田邊明子	田村游古	千野霜月
東瀬青綬	徳永慈峽	豊嶋智勇	内藤芳則
長尾和香	中島みつ子	中山さおり	奈良京華
西岡翠蘭	西澤緑風	根本由紀	原田勝枝
深川兆瑤	福島征英	福田佳子	古谷幸子

入選

穂積青潭	堀江直美	牧島孝真	松野浩範
宗島余光	森 敬子	山上尚子	山田緑水
横島輝枝	依田紅瑞	渡邊青羅	渡辺抱琴
相澤未来	赤塚智子	阿部 雅	荒原香堂
石川清香	石嶋正道	一乗敬子	伊藤幹夫
稲葉夕映	白井紫音	梅澤江月	大川華風
大河原佳子	大木起代子	岡田恵華	岡本美佳
小澤洋子	小野田子雪	加賀屋明子	亀田英舟
川原江以子	草間秀幸	倉嶋秀明	倉持利明
小森カズエ	小山美紀	坂口白峰	櫻井翠嶺
佐藤実夢	佐藤優衣	重田江彩	志村 幸
杉浦広輝	須藤隆史	染谷君恵	高内芝蘭
高橋秀俊	高橋幸江	竹治青麗	田所佐季
田中嶺華	谷 丹霞	内藤 愛	永山由佳
西岡美知江	野坂翠絹	長谷川恵子	濱上裕子
濱野育子	林 葵丘	平野豊溢	広沢光香
藤崎澄瑩	藤田靄香	星野恵美子	松浦空吾
松浦直子	丸山兆基	三浦嘉乃	八木智美
山浦柚美	山田緑亭	横瀬晃子	横瀬克江
吉田直美	吉野清美		

高校生の部

準特選

井河薫乃	上野裕子	大竹葵音	木下奈映
栗原真璃子	杉本初依	田羅原由侑	中村結希乃
堀越真帆	松島希歩	御苑圭太	森井美樹
渡邊海帆			

入選

相川未羽	會田泰陸	荒井優花	伊藤慶子
上野耕太郎	馬野璃奈	海野黎茉	奥山紗姫
小澤奈央	尾村那月	亀崎翔隆	川上祐奈
小出聖来	小島裕司	小林七花	小宮圭子
佐久間詩織	佐々木香鈴	佐藤千飛	佐藤もも葉
島津恋世梨	清水雅姫	清水梨央	鈴木光
鈴木理子	高木大成	宝田和	竹田爽椰
竹鼻美羽	田代七海	辻村凜々子	道間智美
行川文幸	成田晴哉	成田大翔	長谷川まりあ
平賀凜	廣瀬稀美佳	広瀬ダニエル	本多彩乃
道林南美	三橋彩花	南咲希	箕田歩実
宮川結有	宮野悠花	矢花嶺奈	山田名月
湯田金太郎	横山あすか	渡辺誠	

第62回 太玄会書展 会場風景

令和3年1月20日(水)～26日(火) 会場: 東京都美術館



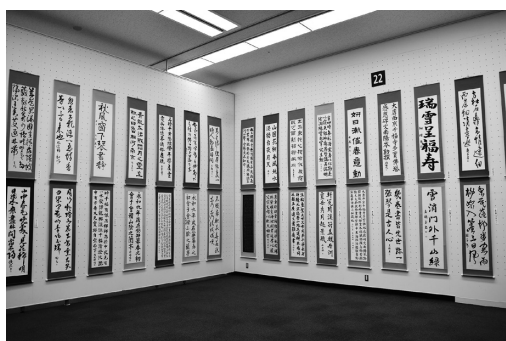
会場風景



会場内での役員による集合写真



会場風景



学生選拔展



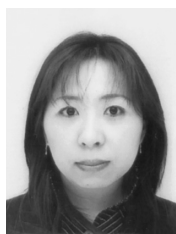
受付風景



来賓との歓談

第62回太玄会書展 受賞者の言葉

太玄大賞を受賞して



第六十二回太玄会書展 太玄大賞受賞

書人社 浅 香 麗 芳

この度は思いもかけませず、第六十二回太玄会書展におきまして榮譽ある太玄大賞を賜り本当にありがとうございました。これも偏に梅原清山先生、西村東軒先生、そして陰ながら応援して下さいる奥様のお陰と心より感謝申し上げます。また審査をして下さいました先生方に厚く御礼申し上げます。一昨年春に体調を崩し二カ月間の入院生活を送りました。その後、一年近く書道から遠のいておりましたがコロナの件もあり、御教室へ行く機会が延びてしまい七月頃から日展の練習に入りました。お休みしておりましたので筆を持ちたいと思う気持ちが強くなり、練習にも熱が入ったかと思えます。幸い日展に初入選させて頂き、その勢いに乗じて太玄展の練習にも集中する事が出来た様に思います。御陰様で素晴らしい太玄大賞まで受賞させて頂き、二重の喜びに未だ半信半疑の心境です。今回は唐の詩人、高適の詩を楚簡風に書かせて頂きました。下書きしました時、墨の強さと、余白のバ

ランスが綺麗に見えたので作品に選びました。

今回この様な賞を受賞するまでに、御指導下さいました西村先生には本当に、感謝の気持ちで一杯です。社中の皆様には日頃から身体を気遣っていただき、励ましの御言葉をいただき、本当にありがとうございます。

これからも先生の御指導に酬いる事が出来ます様、努力研鑽して参りたいと思います。先生、皆様今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

太玄大賞を受賞して



第六十二回太玄会書展 太玄大賞受賞

青龍社 柏 原 桂 雪

この度第六十二回太玄会書展におきまして太玄大賞を受賞させて頂きました。

ひとえに下谷蘊雪先生のご指導の賜物と心から厚く御礼申し上げます。

また、選考委員の先生方にも御礼申し上げます。毎年展示された自分の作品は、墨量が少なく寂しい印象が続いていました。今回は墨量を入れ、力強く、伸びやかな作品作りを心がけました。しかし、思うように書けず、気は焦るばかり。最後の錬成会で、

すがるように下谷先生に的確なアドバイスを頂き、一枚一枚無我夢中で書き込みました。締め切り時間ぎりぎりですと一枚作品を選んで頂きました。

賞を戴く度に書の奥深さと未熟さを思い知らされます。これからも日々努力して一歩ずつ先に進んで参りたいと思います。

今後共ご指導の程宜しくお願い申し上げます。

太玄大賞を受賞して



第六十二回太玄会書展 太玄大賞受賞

書星会 時 田 大 祥

この度、第六十二回太玄会書展におきまして、栄えある太玄大賞を賜り、身に余る光栄に存じます。コロナ禍で多くの行事が中止となる中、展覧会を開催してくださった役員の皆様、また審査員の先生方に、まずは心から感謝申し上げます。

今回の受賞作は、高適の七言律詩二首を四行で書きました。日頃勉強している王鐸の書法を醸し出せればと願いながら制作しましたが、まだまだ勉強不足です。苦勞した点は、連綿の難しい部分が数ヶ所あり、なかなかうまくいきませんでした。しかし、先生のご指導により、無理のない連綿ができるようになりました。そういう所が、古典の勉強量の違いなのだと痛感しました。

今後は、自分が弟子にそのような指導ができるよう、もっと古典を勉強し、字形、連綿の仕方、布置章法などを学んでいきたいと思えます。そして来年以降、さらにより作品を出品できるよう、精進してまいります。

太玄大賞を受賞して



第六十二回太玄会書展 太玄大賞受賞

鳥跡会 吉 村 清 志

この度は、太玄大賞という名誉ある賞をいただきありがとうございます。私の作品を評価していただいた、諸先生方、鳥跡社中の皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。

私は大学を卒業してから二十年近く、大学で学んだ創作の仕方に基づき、書籍やインターネットを参考にし、暗中模索しながらの作品作りをしてきました。鳥跡会の先生方は大学からの延長ということで、直接指導をしていない私の作品を快く出品させていただきました。そのような温かい対応をしてくださった先生方のお心があつたからこそ頂けた賞だと思っています。重ねて感謝申し上げます。

今回の作品は、墨量を多くし、全体的な強さを意識しました。そのため、文字の余白を残すことと、強い線をひくことを心がけました。線や字形、作品の構成は趙之謙や張猛龍碑を少し意識して書きました。

まだまだ勉強中で未熟な身です。更に良い作品作りを目指して臨書に創作に励もうと思います。

太玄賞を受賞して

第六十二回太玄会書展 太玄賞受賞

高友社 天 寺 雅 良

この度は、第六十二回太玄会書展に於きまして身に余る賞を賜り驚きと戸惑いでいっぱいです。賞には無縁と思っていましたが、光栄なことと感謝致し、諸先生方のおかげと深くお礼を申し上げます。

思い起こせば、海外転勤で生活した台湾にて時間を作り故宮博物院に通い、また臨書を中心に学んだことが今の私の原点になっております。多数の国を廻り帰国してから書展にて高友社の落野雅宣先生の作品に出会い感動致し入会させて頂き今に至っています。ここまで書道を進めて来た事は、先

生のご指導と共に歩んで来た書友の皆様のおかげと、有難く思っております。今回の作品は、今まで臨書をして来ましたが総まとめとして自分なりに漢字をいかに動かし、リズム感



を出し全体のバランスが保てるように心がけたつもりです。これからも如何に楽しく自分らしい想いを表現出来るか精進したいと思っています。ありがとうございます。

太玄賞を受賞して

第六十二回太玄会書展 太玄賞受賞

書星会 尾 崎 清 爽



この度は栄えある太玄賞を頂き誠にありがとうございました。思いがけない受賞に喜びと感謝の気持ちで一杯です。これも偏にご指導頂きました宮負先生と、書友の皆様の励ましのお陰と心からお礼申し上げます。

物心ついた頃には文字を書くことが大好きで、高校入学とともに書道部へ入部しました。仲間が三年間通して一つの法帖と向き合う中で、私は芸術の授業で新しい書体を習うと直ぐに飛びつき篆書や隸書、様々な古典を臨書の日々。無心で書に没頭できた高校時代が今でも私の原点になっています。

十四年前に書星会師範のお許しを頂いて展覧会にも挑戦するようになり、作品を制作する中で改めて古典臨書の大切さを痛感しています。中でも傅山は流麗な動きと線の煌めきに惹かれて学んできましたが、今回の作品を会場で見れば線の甘さが目立って己の不勉強を実感しま

した。一本の線を一生懸命引いて今後とも精進して参りますので、ご指導の程宜しくお願い致します。

太玄賞を受賞して

第六十二回太玄会書展 太玄賞受賞

真仙会 小林 まさ子

本会、第六十二回展に於きまして太玄賞をいただき、身に余る光栄と感激いたしております。審査に当たられました諸先生方の御厚情の賜と深く感謝申し上げます。

今回の作品は、萬葉集第一巻二（長歌）を二尺六尺横作品と致しました。昨年の四月開催予定の青丹会書展に発表する予定で構成を考え、錬成会（昨年二月）の折、私の師であります、吉川美恵子先生のご指導をいただきました。先生の見事な運筆、字型のとり方、行と行の響き合い等々……。しかし、その後の世界が新型コロナ禍に突入、翻弄され、全ての展覧会が中止となってしまいました。しかし、作品に向かう姿勢を持ち続け一年がかりで取り組み、今回の太玄展に発表致しました。コロナ禍にあり、気持ちの落ち込んでしまったこともありましたが、今年の朝日二十人展で発表



された吉川先生の作品「朝の来ない夜はない」（吉川英治の言葉）を信じ、これからも遅々なりに成長していけますよう、日々精進して参りたいと思っております。

今後とも太玄会の諸先生方のご指導をお願い申し上げまして、受賞の御礼の言葉と致します。

お礼



第六十二回太玄会書展 太玄賞受賞

九龍社 森 鵜 石

第六十二回太玄会書展にて不肖の私が「太玄賞」をいただく名誉に与り光栄に思います。ひとえに垣内楊石先生、前川郷石先生をはじめ多くの先輩方から時に厳しく、時に温かくご指導いただけたおかげだと存じます。晴天の霹靂という言葉がありますが、受賞の知らせを聞いた時は、まさに雷にうたれたような気分でした。実はいまだにそんな不思議な気持ちであります。

大学時代から王鐸の書に魅力を感じ、少しでも自分のものにできたらと思い取り組んで参りました。今回は李白の詩を青墨で、文字の大小や潤渇、疎密に気を配った三行書きの行草書にしました。しかし、現実には厳しく満足にはまだまだほど遠いものです。

好きで選んだ道、亀の歩みの如くかもしれませんが続けていきます。

至らない点ばかりですが、どうか今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしく願います。

本当にありがとうございます。

更なる向上を目指して



第六十二回太玄会書展 全日本書道連盟賞

書星会 川 名 僊 苑

第62回太玄会書展において、全日本書道連盟賞受賞の一報に大変な驚きとともに、耳を疑いました。その後徐々に喜びがこみあげてきました。日頃ご指導頂いております諸先生方と励ましてくれる書友の皆様のお陰と感謝申し上げます。作品は多字数を黄色系の二尺八尺の用紙を五分割にして、行草連綿を疎密の変化と、墨量・余白・渴筆に留意しながら、明るく表現する様に望みました。五枚の用紙にバランスよく墨を配置する難しさを感じながら何度も繰り返し試みたものです。今回作の反省点は更に次への課題としてつなげていきたいと思えます。今後は健康である限り書にかかわり、多くの作品を鑑賞し、古典臨書をおろそかにせず、作品制作の向上を目標に研鑽を重ね精進して行きたいと思います。書を続けていられる環境と、指導者に恵まれている自分は幸せです。今後とも御指導よろしくお願い申し上げます。最後になりましたが、太玄会の益々のご発展を祈念申し上げます。

全日本書道連盟賞を受賞して



第六十二回太玄会書展 全日本書道連盟賞

菅菰会 倉 持 茜 祥

第62回太玄会書展におきまして全日本書道連盟賞を頂き審査にあたられました諸先生方に心より深くお礼申し上げます。

子育てが一段落し趣味のひとつとして近くの書道教室に通い始めたのが平成三年三月でした。その先生がまもなく体調を崩され「臨書を勉強しておけばどこへ行っても通用する」とおっしゃられ手当たり次第に臨書を書き続けてきました。先生が亡きあと平成二十年四月に石川流芳先生の許で学ぶことになり熱心なご指導により今日までに成長することが出来ました。

しかし臨書を勉強してきたと申ししましても半紙に形や線を明確にひたすら書き写していただけのものでした。半切や二八等の作品にするには「それでは単なるコピーにすぎない」と指摘を受けそつくりを書くことが臨書だと思い込んでいた私には目からウロコでした。

文字の大小、太細、疎密、墨量等によって流れが出来て作品になるという。構成がいかに大切かということに気がつきました。臨書をいかに作品に表すかという難題を乗り越えるよう精進してまいります。今後の太玄会の益々のご発展をお祈り申し上げます。

私と書



第六十二回太玄会書展 全日本書道連盟賞

鳥跡会 妹 尾 敏 子

第六十二回太玄会書展におきまして身に余る賞をいただきましたことは、言葉に表せない程の驚きとうれしさで胸がいっぱいでございます。

一月七日一通のメールが送られてきました。「太玄会書展審査に来ています。全日本書道連盟賞です。おめでとうございます」中尾勝子先生からのメールでした。

新型コロナウイルスで大変な時期に東京での審査へ行つて下さりその上名譽な賞に推薦していただきました。太玄会の諸先生方、中尾先生に深く感謝申し上げます。

義母を亡くしたばかりで沈んでいました時だけになんとお礼申し上げていいのか……。さっそく祭壇の義母に報告しました。いつも私に理解を示して下さいさり応援してくれていた義母でした。さぞかし喜んでくれているに違いありません。

作品は昨年六月の錬成会で中尾先生に添削していただき、その後月一度の錬成会に参加して枚数を重ねて書いた作品です。

故田中双鶴先生がいつも言われていた言葉を思い出しながら書き進めて参りました。それは「字が一つ一つにならないこと」「会場でみんなが振り返ってくれるような、人に感動を与える作品を書きなさい」

い」のお言葉でした。

今後は、作品に古典の「匂い」がする字が書けたら…と願っています。諸先生方、御指導宜しくお願い申し上げます。

御礼のことば



第六十二回太玄会書展 全日本書道連盟賞

書人社 備 前 徹

このたびは、第六十二回太玄会書展におきまして全日本書道連盟賞を賜り、誠にありがとうございます。ご指導いただいております梅原清山先生はじめ太玄会のみなさまに心より御礼申し上げます。

今までは、梅原先生からのご指導のお言葉だけでなく、稽古場での他の方々のお作にも触れ刺激を受けて学ぶことも多かったのですが、今回は新型コロナウイルスの影響でそれがかわらず、会場で初めてお仲間の作品に触れるという状況でした。

表装された自分の作品を会場で見ていると感じていたのは「もっと伸びやかに書けないものか」ということでしたが、今回は以前より少しよくなったのかもしれない。いただいた賞に値するのかわか、その不安を払拭することはできませんが、この賞に値する作品が常に見えるよう今後も精進を重ねてまいりたいと存じます。どうぞよろしくお願い致します。誠にありがとうございました。

第63回 太玄会書展〔併催 第6回学生選拔展〕

日程表

年月	4 1	7	8	9	19	20	21	22	23	24	25	26
曜	金	土	日	水	木	金	土	日	月	火	水	曜
作業内容	搬入	会員賞選考	鑑別・審査	陳列	開会	開会	開会	開会	授賞式 昼食及び 高校生 の会	開会 授賞式 祝賀懇親 会	開会	最終 作品撤 去日
時間	10:00 ～ 12:00	11:00 ～	11:00 ～	10:00 ～	9:30 ～ 17:30	9:30 ～ 17:30	9:30 ～ 17:30	9:30 ～ 17:30	9:30 ～ 17:30	9:30 ～ 17:30	9:30 ～ 17:30	9:30 ～ 14:00
会場	都美搬入 出室	都美審査 室	〃	都美展 示室	〃	〃	〃	上野精 養軒 (中止)	都美展 示室 上野精 養軒 (中止)	〃	〃	都美展 示室
担当部	搬入出 部	審査事 務部	〃	陳列 部	会場当 番	会場当 番	会場当 番	渉外接 待部	渉外接 待部	会場当 番	〃	搬入出 部

役員及び各部部長

名誉顧問	梅原清山	理事・総務	垣内蘭畦
常任顧問	福田丞洲	理事・総務	石島廻山
常任顧問	田中鳳柳	理事・総務	遠藤有翠
常任顧問	笠原聖雲	理事・総務	木全珠香
常任顧問	垣内楊石	理事・総務	植木蒼穹
会長	石川流芳	理事・総務	鎌田龍祥
副会長	西村東軒	理事・総務	中尾勝子
副会長	露野雅宣	理事・総務	中田珪川
理事	鈴木映華	監事	志村恵風
理事	瀧沢曲峰	監事	小林紫雲
理事	小原天簫	會計部長	山口香葉
理事	伊東玲翠	事業部長	落野祐涯
理事	高橋心行	広報部長	荒井湧山
理事	宮負丁香	渉外接待部長	石井蕙園
理事	金丸鬼山	図録部長	小林碧桃
理事	伊場英白	搬入部長	江原紫光
理事	小出聖州	審査事務部長	山村鳳羽
理事	江原見山	陳列部長	伊藤慈恩
理事	大場大幹	褒賞部長	小泉興起
理事	下谷蘊雪	祝賀会部長	大河原由佳
理事	飛田冲曠	学生部長	鳥越新芽
理事	海野十方		

第63回 太玄会書展入賞・入選者（五十音順）

理事の部

太玄大賞

大木 眺峰 尾崎 清爽 小林 桂葉 三好 凌香
山口 杏園

審査会員の部

太玄賞

大木 操守 小俣 柏翠 川井 韶瑞 菊地 梨祥

全日本書道連盟賞

佐久間 輝珠 春藤 真紀 中山 高鳳 西沢 薫風

正会員の部

特別賞

牛尾 雅高 鈴木 景子 細 測 金杏 松井 芙蓉
山崎 のり子

奨励賞

相木 小百合 鈴木 光鶴 高橋 玉泉 手島 萬峰

会員新人賞

池田 芳翠 上野 華雪 海老沢 京香 小澤 雲峰

小山 萌生 佐藤 小暉 猿田 紫陽 下間 佳璋
藤田 寿仙 松永 愛泉 茂木 朱櫻

準会員の部

推選

青木 爽游 阿部 弘信 阿部 寛 石井 白玲
大熊 勇 大山 堂以 鎌形 美容 窪田 静花
栗原 紫翠 小出 厚隆 坂 智大 佐藤 蒼艶
佐原 美醉 高橋 希兆 西方 勇弦 根本 恵和
日野 緑 福岡 華泉 福塚 光徳 増 測 香泉

準推選

荒井 蓬月 石井 梅香 石川 惺楓 石川 芳泉
稲生 妙子 今泉 寛宏 浦崎 沁雅 瓜田 余響
大嶋 瑞禾 大場 青峰 岡島 寿石 小野 翠香
風間 翠泉 勝畑 喜市郎 加藤 暉川 岸 美津子
久保田 溪堂 毛塚 佳泉 古賀 輝煌 国分 滋潤
後藤 爽紀 児山 九聲 斉藤 光天 斉藤 浄心
笹木 瑞希 杉山 早霞 仙石 良子 高橋 紅葩
中村 丹裳 中山 志峰 南雲 鸞草 夏目 紅恵
奈良 京華 西原 彩華 葩島 召泉 橋本 啓華
平野 渚秋 藤永 真里 古澤 双葉 堀内 崔舟
本間 直人 松本 娟秀 室井 春草 山口 京子
渡辺 佳祥

公募の部

特選

井内淑恵	市川麗	岩崎悦子	大井綾華
大山紫彩	甲斐谷朋隣	木下正覚	小杉恵美子
坂本壽蓉	佐々木啓春	佐々木芳華	佐藤英
佐藤清泉	佐藤実夢	鈴木光	瀬戸文華
染谷君恵	高柳浩美	田中春曄	谷丹霞
豊嶋智勇	永山由佳	長谷川真子	藤沢貞行
舛田昌玄	御田村翠玉	山田静光	横島輝枝
依田紅瑞	渡邊青羅	渡辺抱琴	

準特選

相澤未来	赤塚智子	阿部雅	荒原香堂
飯田そら	池田華遙	石嶋正道	伊藤兆菜
伊藤幹夫	稲葉夕映	岩間鶴巢	梅澤江月
大川華風	岡本美佳	小澤洋子	数本好慧
片岡久美子	金丸畢山	川原江以子	城所そら
草間秀幸	小岩瑞季	小林ひな子	斉藤遥南
櫻井翠嶺	佐藤榮壽	佐藤優衣	杉山香雨
鈴木明子	鈴木花仙	高井則子	高橋秀俊
高橋幸江	竹治青麗	田中嶺華	千野霜月
辻昌子	手塚恵翠	東瀬青綏	徳永慈峽
友成恵	内藤愛	内藤芳則	中村結希乃
中谷胡翠	中山さおり	野澤和翠	濱上裕子
原田勝枝	深川兆瑤	星野恵美子	穂積青潭

入選

堀江直美	松浦直子	宗島余光	村田定暁
森敬子	山浦柚美	山田緑水	横瀬晃子
横田亜矢子	吉野清美	綿内良子	
新川亜弓	飯田小夜子	池田奈々恵	石井琇水
石川清香	石川良子	磯谷ひなた	一乗敬子
大河原佳子	大木起代子	岡田恵華	岡田紗英
小田順子	小野田子雪	金子きみ代	亀田英舟
川谷淳一	草薨美恵	串橋緑波	国吉和子
倉持昌世	小池礼凌	鯉沼美恵子	小林光堂
小林博子	小森カズエ	小山美紀	佐鳥光浩
重田江彩	鈴木凡燕	須藤隆史	高内芝蘭
高野小夜加	武田久代	竹村恵鳳	田中恵美
田邊明子	角田恵美子	中島みつ子	中村春彩
西岡美知江	野坂翠絹	野村成美	濱野育子
林葵丘	広沢光香	福田佳子	藤崎澄瑩
藤田靄香	藤本真理	牧島孝真	松浦空吾
松村知勝	松本寛恵	三浦嘉乃	箕田歩実
森結子	山上尚子	山田緑亭	山中瑠太郎
湯田茜	横瀬克江	吉田壮秀	米澤志織
若麻績弘道			

高校生の部

準特選

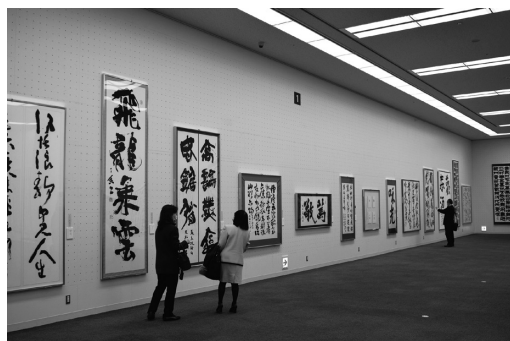
會田泰陸	小川乃愛	小原双葉	川島史子
神田岳洋	小出聖来	島津恋世梨	清水雅姫
竹鼻美羽	行川裕	広瀬ダニエル	真鍋優妃乃
山端花歩	渡邊海帆		

入選

浅野華梨	飯塚康丞	祝ゆず	白井菜乃香
内山留那	馬野璃奈	大川葵	大澤珠璃
大竹奏羽	小川眞誉	奥山紗姫	尾村那月
加藤勝也	鎌形綾音	亀崎翔隆	北野美咲
木下奈映	木本実佑	国行莉子	栗原彩寧
栗原真璃子	紅松利奈	小泉唯花	小島誠
小竹原彩花	斎藤幸平	坂本佳菜	佐々木香鈴
渋井萌笑子	庄司一駿	杉浦綺華	鈴木まこ
鈴木理子	宝田和	椿翔晴	徳山心海
戸島悠真	中谷月伊那	中村舞	成田晴哉
成田大翔	丹羽快斗	長谷川まりあ	廣瀬稀美佳
船崎菜々子	船崎菜々子	本多彩乃	南咲希
宮川結有	宮田桜	宮本絵梨	村松芙美
森田桃子	山上彩葉	山本美咲	横山あすか

第63回 太玄会書展 会場・授賞式風景

令和4年1月20日(木)～26日(水) 会場:東京都美術館



会場風景



学生選抜展



会場風景



授賞式会場



授賞式風景



特別賞選考委員



審査委員

第63回太玄会書展

謝 辞

受賞者を代表いたしまして、誠に僣越ではございますが、お礼のことを申し上げます。
只今、太玄会会長をはじめ関係する多くの先生方のご臨席のもと、第六十三回太玄会書展において受賞の榮譽にあずかり、身に余る光栄と感謝申し上げます。

新型コロナウイルスが世界中に広まって二年余りになります。書道界においても多くの展覧会を開くことができない経験をする中で、今回第六十三回太玄会書展は沢山の先生方のご尽力を頂いて開催され、作品発表の場を頂きましたこと、そしてその過程で書作品の制作者として育てて頂きましたことを、重ねてお礼申し上げます。

私事ですが、先日洋画の作家と作品制作についてお話をする機会がございました。傘寿を迎えるその方の作品は、明るく、若々しく、見るほどに変化に富んでおり、「良い作品」というものが、ジャンルを越えて人の心を動かすことを改めて教えられました。「この方の次の作品を見たい」と楽しみにされる作家に、いつか自分になつていかれるよう、今後日々精進を重ねてまいります。

そして、このご恩を忘れることなく、微力ではございますが後進への導きと美術界への貢献をもって、今回の受賞のお礼をさせていただく所存でございます。

最後になりましたが、このような機会を与えてくださいました太玄会の諸先生方に対し、心からお礼を申し上げますとともに、今後、なお一層のご指導・ご鞭撻をお願いいたしまして、受賞者を代表し感謝のことばといたします。

本日は誠にありがとうございました。



令和四年一月二十三日

受賞者代表 書星会 尾崎 清爽

第63回太玄会書展 受賞者の言葉

太玄大賞を受賞して



第六十三回太玄会書展 太玄大賞受賞

研友社 大 木 暁 峰

この度は太玄大賞という名誉ある賞を頂きありがとうございます。
この作品は四十字、三行で祖詠詩より、春の詩を選びました。下書
きは鉛筆でノートに、あるいは不用になった用紙に書き、枚数を減
らしました。文字の大小、墨の潤濁、
線の太細、行の流れを意識し、今ま
で以上に墨量を増して書きました。
一枚書いては壁に貼り、スマホで写
真を撮り全体の構成を確認し、何度
かくり返しました。

これから自分の書は何を求めている
けばよいのか、展覧会だけの書作に
追いかけている日々ですが、自
分の書は、美的感覚、芸術的感覚等が、
物足りない気がします。



もう一度、王羲之の行書や褚遂良の楷書など基本にかえり臨書して
みたいと思います。これらが作品にしみ出るよう、自己研鑽に励み、
進んで行きたいと思っています。

今後とも、ご指導賜りますようお願い申し上げます。

太玄大賞を受賞して



第六十三回太玄会書展 太玄大賞受賞

書星会 尾 崎 清 爽

この度は第六十三回太玄会書展におきまして栄えある太玄大賞を頂
き、身に余る光栄と厚く御礼申し上げます。これも偏にご指導賜りま
した理事長先生をはじめ、書友の皆様の励ましのお陰と深く感謝いた
します。

ここ数年の課題として取り組んでおりますことは、傳山の書風をベ
ースにしながら徐渭の表現力と懐の深さを加えていくことです。線は
黒く、明るく、又、重厚さを目指していますが、そこにカスレが加わ
ると非常に難しく、まだまだ勉強不足です。今回も受賞の喜びを胸に
会場で実際に作品に接してみれば至らぬ所ばかりで、次作はもう少し
工夫を考えたいと思います。

又、副会長より「品」についてお話を頂く機会があり、その思考の
領域に少しでも近づいていけるよう精進してまいりたいと存じます。
今後ともご指導ご鞭撻賜りますようお願い申し上げます。

受賞と授賞式に感謝



第六十三回太玄会書展 太玄大賞受賞

真仙会 小林桂葉

第六十三回太玄会書展におきまして、太玄大賞をいただき身に余る光栄と感激しております。しかし連絡を受けた当初は信じられない思いでした。一月二十三日、東京都美術館に展示された自分の作品と対峙し、上野精養軒での授賞式に出席して漸く受賞を実感し喜びが沸き起りました。コロナ第六波の渦中での実施には大変なご苦労があったと思います。役員の先生方と関係の皆様のご尽力に心より感謝し御礼申し上げます。

この度の受賞は偏に審査に当たられました十五社中の役員の先生方のご厚情と日ごろより丁寧なご指導をいただいている真仙会の笠原聖雲先生、瀧沢曲峰先生、小出聖州先生のお陰と心より感謝申し上げます。そして真仙会の皆様と共に学び続ける書友会の皆さんのお支えがあったからこそと思っています。ありがとうございます。まだまだ作品作りでは課題が多く未熟者の私です。今後ともご指導賜りますようお願い申し上げます。

受賞の喜び



第六十三回太玄会書展 太玄大賞受賞

九龍社 三好凌香

第六十三回太玄会書展において、私が目標としていました最高の太玄大賞を戴き、誠に嬉しく、ここに諸先生方のお陰と心から感謝申し上げます。

喜びとともに身の引き締まる思いであります。私は近年、呉昌碩の強い骨力と美しい形の文字の集合美に惹かれ、臨書をしてきました。男性的な文字の魅力と文字群の集合、また流動美を創作に工夫をして出品しました。

今回の受賞を更にスタートとして、多くの古典の臨書に取り組み、研鑽努力してまいりたいと思っています。

今後ともよろしくお願いいたします。
有難うございました。

太玄大賞を受賞して



第六十三回太玄会書展 太玄大賞受賞

菅孤会 山口 杏園

この度、第六十三回太玄会書展におきまして、太玄大賞をいただき、大変光栄に存じます。太玄会会長石川流芳先生、諸先生方に厚く御礼申し上げます。

なかなか墨を上手くのせることが出来ず、精彩に欠ける作品になりがちでしたので、今回は墨付けを意識しながら書きました。

また、日頃、教室において、師匠石川流芳先生のご指導のもと、王羲之の臨書を様々な角度から学んでおりますが、その過程での今回の受賞は、とても嬉しく大きな励みになりました。これからも王羲之の臨書を続けながら、少しでもいい線が引けるよう研鑽を積んでいきたいと思っております。今後ともご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

最後になりますが、太玄会の益々のご発展とともに、太玄会の諸先生方、会員の皆様のご多幸とご健康を心よりお祈り申し上げます。有り難うございました。

心の糧



第六十三回太玄会書展 太玄大賞受賞

書星会 大木 操 守

この度は太玄賞を頂戴し、心より感謝申し上げます。

長期にわたるコロナ禍で、鬱々たる日々を送る中、作品制作に向けて集中し、充実した時間を過ごせたのは有難いことでした。

古典を、墨量を、余白をと、心に留めおきながら仕上げた作品でしたが、会場でそつと見ると、離れた筈の偏と旁は窮屈そうで恥ずかしく思います。まだまだこれからと、気持ちを切り替え、心新たに作り組んでいこうと思います。

師が書の世界を教えてくださるように、私も少人数ですが、お稽古に来てくれる生徒に書の楽しさを感じてもらい、永く筆を持つことで豊かな表現ができるよう導いていけたらと思っています。

振り返ると、書に出会い続けてこられたことは、心の糧となりました。これからも一層精進して参りますので、ご指導よろしくお願い申し上げます。

太玄賞を受賞して



第六十三回太玄会書展 太玄賞受賞

書人社 小 俣 柏 翠

この度は太玄賞を賜り、大変身に余る光栄と存じます。会の諸先生方に誌上をお借りし御礼申し上げます。有り難うございました。これも偏に梅原清山先生、西村東軒先生のご指導のお蔭と深く感謝申し上げます。

「旋乾転坤」は、天地を一回転させて元の位置に戻すという意味で、天下泰平の願いが込められた言葉です。新型コロナウイルスの流行で生活は一変しましたが、また笑顔を見せあえる世の中に戻れたら…。そして元氣いっぱいの我が子（四歳・一歳）が仲良く過ごしてくれそうです。ように…。そんな思いで選文いたしました。

しかし中々上手くいかず、お恥ずかしい限りです。挫けてしましますが、先生、先生の奥様、社中の皆様、そして家族や亡き兄弟の応援を思い出し、何とか今日があります。そして、見放さずいつも暖かく的確なご指導をくださいます西村先生には、本当に感謝してもしきれません。未熟者ではございますが、今後とも皆様のご指導ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

書との出会い



第六十三回太玄会書展 太玄賞受賞

研友社 川 井 韶 瑞

今思い返してみると、桜の名所であった、千葉県成田市立三里塚小学校での書き初めてで金賞を頂き、教室に貼られた数々の作品の中にある金賞のプレートが誇らしかったです。

先生から『文字がきれいになったね』と褒められたことが幼心にとっても嬉しかったです。

時が過ぎふと立ち止まり、何か特技を身に付けたいと思ったとき、書道が第一に思い浮かびました。

四十歳過ぎに書道を始めて、二十数年続けてこられたのも小学校の時の思い出の延長です。

太玄会の作品作りも七月の研友社錬成会より始め、漢詩の選定で作品の良さが八割決まると言われ苦労しましたが、素晴らしい詩に出会いました。内容が『サマルカンドの街はひっそりしているが軒を連ねた家は何万戸、自前で葡萄酒を作り、ボタンキョーの花が咲き鶏舌の香りの肉をたらふく食べ人生うまい物を食べる為に有りそのために大砂漠を超えて行くなぞ物の数ではない』素晴らしい豪快な詩です。先生からは、墨量が多い、運筆が早いからゆっくり、雑、漢詩を良く読み考えて、綺麗だけではなく見る人がドキリとする心打った作品をと、厳しい稽古が続きました。長期に渡り指導して頂いた須田先生に感謝します。

亡き田中鳳柳先生も、研友社作品を応援してくださったと思います。次は、太玄大賞目指し頑張ります。

太玄賞を受賞して



第六十三回太玄会書展 太玄賞受賞

菅孤会 菊 地 梨 祥

令和四年一月二十三日上野精養軒に於て、第六十三回太玄会書展表彰式が行われました。西村東軒先生より、コロナ禍での作品作りへの労いのお言葉と更なる高みを目指して精進すべし。との激励を頂きました。表彰式での徹底した感染対策を見るにつけ、沢山の先生方の御尽力の賜物と改めて感じ入りました。コロナ禍にあつて私の生活も変わりましたが、自分と書との関わりを見つめ直す時間を持つことが出来ました。三十年以上続けられるテーマに出会えたことと自体有難いと感じます。七十代になっても、いまだに目標とする師・諸先輩方に恵まれるのも書あつてこそこの思いです。

今回の太玄会書展出品に際し、石川先生の御指導によりここ暫くの課題であった自然な線・大らかさ等、やっと少し変わることができたかと感じたところでしたので受賞の報せは別格な喜びとなりました。御選出に心より御礼申し上げます。最後に、太玄会の益々の御発展と皆様の御健勝をお祈り申し上げます。

書と私



第六十三回太玄会書展 全日本書道連盟賞

書星会 佐久間 輝 珠

この度は、思いがけず「全日本書道連盟賞」というすばらしい賞を頂き、驚きとともに大変感激しております。ありがとうございます。コロナ禍において展覧会も中止されることが多く目勉強も思うようにできず、又直接指導を受けることもできない状況の中、自分と向かい合う貴重な時間となりました。一枚書いては今までの指導を思い出し、また書くという事の繰り返しでした。更に今までの様に時間を割く事もできず、何となくつかみかけたものが元に戻ってしまい、日にちだけが過ぎていくもどかしさを強く感じていました。提出できた時は妙な安堵感さえ覚えました。

思い返すと、書との関わりは私の人生の半分以上となり、太玄会書展においても公募から出品し一つずつ段階をふみ審査員となり、更に今回の受賞で理事にさせていただきました。

自分と向き合うなかで、「やはり書道が好き」という感情の確認ができ、書続ける事ができる環境にも感謝しています。「書」には書いた人の人格や人生が表れると言います。これからも古典の勉強を続け、自分の思いや生き方が書に表れるよう努力していきたいと思っています。

まだまだ未熟でございますが、これからもご指導ご鞭撻宜しくお願い致します。

全日本書道連盟賞を受賞して



第六十三回太玄会書展 全日本書道連盟賞

鳥跡会 春 藤 真 紀

この度は、全日本書道連盟賞を受賞させていただき、審査をしてくださった先生方や、鳥跡会の中尾先生に心よりお礼を申し上げます。

今回の太玄会書展の作品を制作するにあたり、何を書こうかとも迷いました。義父 春藤大耿が亡くなり四年が過ぎました。師でもあった大耿の存命中は、何を書こうかと相談したり、添削を受けたりすることもできましたが、今はかきません。またコロナ禍でもあり、錬成会も少なく鳥跡会や耿の会の先生方にご指導いただく機会も年に数える程です。悩んだ末、十数年前に義父に指導を受け徳島県展で準特選となった作品を選びました。

今の力でどのくらいの作品が書けるのか挑戦してみました。粗い所もあり、義父がいれば何度も直されたことでしょう。けれど、締め切りぎりぎりです。仕上げたこの作品が、賞をいただくとは、義父大耿も天の上で喜んでくれるでしょうか。

今後も、太玄会や鳥跡会、また耿の会の名に恥じぬよう研鑽を積んでいく所存です。どうかご指導よろしく願います。

全日本書道連盟賞をいただいて



第六十三回太玄会書展 全日本書道連盟賞

真仙会 中山 高 鳳

このたび第63回太玄会書展におきまして、思いもよらず全日本書道連盟賞という大きな賞をいただき誠にありがとうございます。感謝の気持ちでいっぱいです。今回の受賞は真仙会会長小出聖州先生はじめ、会の多くの先生方のご指導とご厚情の賜と心より御礼申し上げます。

いつも作品添削の折には、墨量、筆圧、スピード等ご指導いただき、今回も一枚書いては眺め、また書いてはみるもののなかなか変化が出ない、の繰り返しでした。知識としては理解しているつもりでも腕に実践されないのはやはり書き込み不足といつもながらの反省です。ただ、今回は墨量を今までになく多くのせたつもりです。でもそうなるとうる重くなったり、字に空気が入らなくなったりと、次の壁にぶつかりもつと精進せねばと痛感しました。

また、二年に及ぶコロナ禍において授賞式を挙げていただき、先生方、関係者の皆様には心より感謝申し上げます。誠にありがとうございます。

心動かされる書を

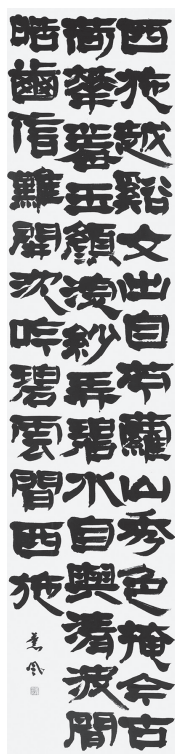
第六十三回太玄会書展 全日本書道連盟賞

真仙会 西 沢 薫 風

この度、第六十三回太玄会書展におきまして、身に余る全日本書道連盟賞をいただき、深く感謝しております。日頃より熱心にご指導をいただいております関吾心先生をはじめ、審査に当たられました諸先生方のご厚情の賜と心よりお礼申し上げます。

書を始めたのは、職場の友人から『一緒に書道のお稽古にいきませんか?』と誘われたことがきっかけでした。小学生の頃の書き初め程度で経験も少なく、当時はアラフォーという言葉が流行していた頃でしたが、こんな遅いスタートで大丈夫かしらと不安でもありました。しかし、綺麗な文字は以前からの憧れであり日常の願いでしたので、良い機会を得て、関吾心先生に師事することができたのは本当に幸運なことでした。

古典の臨書を軸に基礎を学び、今回の作品に限らず、関先生には『書き込み』が大切なことをいつもご指導いただいています。しかし、なかなか満足できるところまで到達することは難しく、今回も力量不足を痛感しています。筆勢や墨の強弱、作品の演出など書き込みの中で学ぶことはたくさんあり、引き続き課題として、表情豊かな心動かされる書を理想に、これからも努力を重ねたいと思います。



令和3年度 総会

日時 令和3年4月18日(日) 15時開始
会場 上野精養軒 (司会・大場大幹)

次第

- 一、定足数の確認 (飛田冲曠) (644) 出席73名 (委任状524名)
- 一、開会の辞 (金丸鬼山)
- 一、常任顧問挨拶
- 一、会長挨拶 (西村東軒)
- 一、議長選出 (宮負丁香)
- 一、書記任命 (路野祐涯・伊藤慈恩)
- 一、議 事
 - (1) 令和2年度 事業報告
 - (2) 令和2年度 決算報告、会計監査報告 (小出聖州)
 - (3) 一般社団法人太玄会への移行について
 - (4) 令和3年度 事業計画案について
 - (5) 令和3年度 予算案について
 - (6) 役員改選について
 - (7) 「太玄会規約付則・九回に関する事項」の新設について
 - (8) その他
- 一、書記退任
- 一、議長退任
- 一、閉会の辞

令和2年度 事業報告書

年月日	会議・事業等	会議・事業内容等	会場
24.19	運営委員会(中止) 理事会(中止)	一部役員改選の確認 令和元年度事業報告 令和2年度事業報告 決算報告、監査報告 令和2年度事業計画案及び、 予算案の審議 その他 懇親会	上野精養軒
5.13	事務局・部長会議(中止)	第62回太玄会書展 (併催 第5回学生選抜展)	上野精養軒
5.19	運営委員会	第62回太玄会書展 (併催 第5回学生選抜展)	上野精養軒
7.8	運営委員会	第62回太玄会書展 (併催 第5回学生選抜展)	上野精養軒
10.7	事務局・部長会議	第62回太玄会書展 (併催 第5回学生選抜展)	上野精養軒
12.13	搬出・入部 運営委員会 理事会	第62回展書類搬入 第62回太玄会書展 (併催 第5回学生選抜展)	上野精養軒
3.1.8	忘年懇親会(中止)	作品搬入 審査(会員賞選考) 審査(準会員・公募) 陳列 初日 学生授賞式及び昼食会(中止) 授賞式、祝賀懇親会(中止) 最終日	東京都美術館
1.27	運営委員会 事務局・部長会議	作品搬出 第62回太玄会書展 (併催 第5回学生選抜展)	東京都美術館
3.13	会計監査(中止)	一般社団法人化について	上野精養軒
4.2	令和3年度定期総会	会計監査	上野精養軒
4.18	令和3年度定期総会		上野精養軒

第62回太玄会書展(併催第5回学生選拔展)出品状況

☆総出品点数 1,200点

	名誉顧問 常任顧問 董事 運営委員	理事総務 監事 実行委員	理事 審査員 員 準会員 公 募 学生選拔
22			
7			
65			
114			
97			
115			
155			
162			
463			

第62回太玄会書展入賞状況

4	太玄大賞	全日本書道連盟賞	特別賞	奨励賞	新人賞	推選	準推選	特選	準特選	入選	学生部入選
4	太玄賞										
4											
5											
4											
11											
22											
49											
32											
64											
66											
450											

※入場者数 845名

事務局各部活動状況報告

◎事務局 (担当 副事務局長 江原見山 大場大幹 下谷蘊雪 飛田冲曠)

2 4 役割分担の打ち合わせ

6 令和2年度会員名簿発行

7 第62回太玄会書展実施に向けての打ち合わせ

10 第62回太玄会書展詳細の検討

運営委員会、理事会、忘年懇親会への通知

7 11 牧野商会及び空間堂への第62回太玄会書展の依頼と打ち合わせ

12 本展会場打合せ 会場当番の計画と依頼 総会会場打ち合わせ

3 1 第62回太玄会書展の開催

2 令和3年度定期総会のお知らせ

3 第62回太玄会書展図録の来賓等各位への送付

※年間に開催される運営委員会、理事会、部長会、総会等会議の連絡事務

※報道関係(本展作品)(年鑑、広告)掲載に係る業務

※住所変更、退会届等受付処理業務

※本展の後援等に係る外部団体との連絡・折衝

※東京都美術館令和4年度公募団体展展示室の借館に伴う、書展実施年度の詳細打合わせ等

申請書の作成、提出、承認

(令和4年4月～令和9年3月)の5年間太玄会32会期
1月19日～1月26日

◎会計部 (担当 下谷蘊雪)

2 4 令和元年度の会計監査に向けて仕訳帳等の整理準備

令和元年度の決算書、並びに令和2年度の予算案作成

令和元年度会計監査（回覧方式による受検）

令和元年度決算書、令和2年度予算案報告

5 令和2年度会費納入に関する依頼書等を各社中に送付

6 令和2年度納入会費の整理入力、領収書作成依頼

8 会費領収書を各社中へ送付

10 第62回太玄会書展に関して各部の行動予定の把握

経費の算出及び資金の準備

第62回太玄会書展書類搬入時の準備

11 学生表具料集計確認、公募出品料集計確認

12 第62回太玄会書展必要経費準備

3 1 第62回太玄会書展審査会における経費支払業務

2 第62回太玄会書展に関する経費支払業務

第62回太玄会書展の収支報告書作成

3 令和2年度会計監査に向けて元帳、仕訳帳の入力整理

令和2年度決算書、令和3年度予算案作成

令和3年度総会準備

◎事業部（担当 路野祐涯）

2 5 アオキに会員名札・賞札、今年は準特選も発注

6 風雅プランニングへ出品規定など依頼

7 風雅プランニングへポスター・ハガキなど全書類に関して送

る、校正、初出品票を各社中へ発送

8 真真仙会・九龍社・鳥跡会三社中の会員名札、及び役職札、

事務用品などの確認と整理

風雅プランニングより確認用の出品規定・出品票届く

9 出品規定・出品票を各社中へ、又個人宛を風雅プランニング

に発送依頼

賞状・入選・学生賞状を発注

10 風雅プランニングから各社中、各業者へ書類発送 杉本先生

に賞状発送

表具店へ側表の張り方確認

3 1 東京都美術館に備品搬入

各社中の役職札の手配

備品・賞札の整理

精養軒に賞状、褒賞部依頼品など搬入

年間を通じて封筒は各先生の依頼により郵送

◎広報部（担当 荒井湧山）

2 4 会報原稿編集開始

原稿依頼、ページ校正

新ホームページ制作の検討開始

9 会報76号発行

10 事務局会議

部長会にて会報76号発行の報告 新ホームページ作成計画の

報告 於…上野精養軒

12 理事会 新ホームページ制作について報告 於…上野精養軒

3 1 新ホームページ公開

第62回太玄会書展

写真撮影（審査・会場風景）於…東京都美術館

新ホームページ更新①（2／2）

新ホームページ更新②（2／9）

◎渉外接待部（担当 石井蕙園）

2 10 第62回太玄会書展案内状発送の為、各団体に住所シールを申

請（読売・毎日・産経）

11 案内状を発送 1500枚

◎図録部（担当 小林碧桃）

第62回太玄会書展作品集

2 10 図録に係る基本方針の作成

11 会員賞選考委員、当番審査員顔写真送付依頼

3 1 作品撮影 396点 風雅プランニング

（審査会員以上305、会員受賞者20、準会員受賞者71）

編集 風雅プランニング

2 一回目、二回目の校正

発行部数と発送先の確認

図録発行

各社中事務担当者宛発送 風雅プランニング

◎搬入出部（担当 江原紫光）

2 10 『太玄会書展書類搬入について』を各社中事務担当者に発送

（会計部より受領した払込取扱票を同封）

太玄会書展の日程等

（書類搬入日・作品搬入日の事務作業の説明書）を搬入部委員に発送

12 書類搬入日（12／13）：受付事務の実施

・書類搬入の受付

・社中持参の出品目録等の書類集約

・社中別出品者数表の全体表作成

・出品者数を理事会に報告

・受付書類を担当部長に引き継ぐ

3 1 作品搬入日（1／7）：事務の実施

・作品搬入の受付

・搬入数の確認・確定（表装店8社より持ち込み）

・役職別・社中別数の確認（社中別出品者数表参照）

・出品目録・資格別作品出品数表・社中別出品数表の確定

・事務局長に報告後、審査事務部長に引き継ぐ

作品搬出日（1／27）：立会の実施

・作品搬出の受付

・搬出数の確認・立会（表装店8社の引き取り）

◎審査事務部（担当 山村鳳羽）

2 12 第62回太玄会書展の書類搬入確認(12/13)

審査事務部処理について打ち合わせ

3 1 第62回太玄会書展審査事務部打ち合わせ、

役割分担説明(1/7)

審査手順、作品配置、成績処理について打ち合わせ

作品 737点確認 作品配置

審査場作成 出品者目録校正

(入賞・入選者) 通知ハガキ準備

審査方法打ち合わせ、役割分担確認(1/8)

風雅プランニングと打ち合わせ

会員賞選考委員による審査

会員新人賞の選考審査

特別賞、奨励賞の選考審査

太玄賞、全日本書道連盟賞の選考審査

太玄大賞の選考審査

準推選(10%)の選考審査

高校生の部選考審査

(入賞・入選者) 通知ハガキ作成、発送

作品管理、成績名簿作成

褒賞部へ連絡

◎陳 列 部 (担当 伊藤慈恩)

2 11 各社中事務担当者に陳列人員名簿の依頼書類を送付

12 搬入出部より社中別出品者名簿と準会員・公募の名札を受け

取り、出品者数の確認

牧野商会に出品点数(737点)を連絡し見積もりを依頼

各社中の準会員・公募の名札の確認

3 1 副部長、委員に関係書類を送付

陳列原案を作成

牧野商会担当者、副部長と打ち合わせ

学生部の作品点数の確認

陳列日 陳列人数51名 15時陳列終了

最終日 15時会期終了後、名札等の取り外しと整理

◎褒 賞 部 (担当 小泉興起)

2 12 精養軒担当者との打ち合わせ(12/13)

部員との打ち合わせ(12/13)

書類の作成・整理・確認

事務用品の確認と補充

松下徽章へ賞品のメダル発注

事業部へ賞状の発送依頼(揮毫者宛)

3 1 審査終了後、受賞者の確認

各社中へ発送する賞状、賞品等の一覧表を作成

賞状の揮毫、確認

賞状・賞品等各社中へ発送(1/24)

◎祝賀会部（担当 大河原由佳）

2 11 各社中事務担当者に書類を送付（11／23）

「第62回太玄会書展祝賀懇親会について」

「祝賀懇親会記入用紙」

「会費振込用紙」

着席 1卓5名 コース料理の予定

12 各社中事務担当者、祝賀会部委員に

「祝賀懇親会中止のお知らせ」を送付（12／16）

12／13の理事会において中止の発表

◎学 生 部（担当 鳥越新芽）

2 9 第5回学生選抜展

小中学生の部、高校生の部、出品要項他書類を13社中宛発送

12 書類搬入、出品一覧表、名札、表具料振込コピー受付

学年別出品点数確認

高（64点）、中（137点）、小（262点） 計463点

風雅プランニングに入選者名一覧の発注

3 1 搬入日 作品点数確認 学年別仕分け

陳列日 小・中学生の部、学年別に3段掛けで展示

23・24室使用

証発送 各社中宛入選証、入選者名一覧仕分け

発送は褒賞部に依頼

最終日 15時より軸をおろす

令和3年度 事業計画表

年月日	会議・事業等	会議・事業内容等	会場
3・4・18	第1回運営委員会 第1回理事会 令和3年度定期総会	一部役員改選の確認 令和2年度事業報告、 決算報告、監査報告 令和3年度事業計画案及び 予算案の審議、その他 懇親会	上野精養軒
6・23	第1回理事会 （第2回運営委員会） 第1回事務局・部長会議	第63回太玄会書展 （併催第6回学生選抜展）	上野精養軒
10・6	第2回事務局・部長会議	第63回太玄会書展 （併催第6回学生選抜展関係）	上野精養軒
12・7	搬入出部 12・7迄に郵送又は宅配	第63回展書類搬入	搬入出 部長住所
12・12	第2回理事会 （第3回運営委員会） 第1回理事会 （第2回理事会）	第63回太玄会書展 （併催第6回学生選抜展関係）	上野精養軒
4・1・7 1・8 1・9	第63回太玄会書展 （併催第6回学生選抜展） 審査（会員賞選考） 審査（準会員・公募） 第3回理事会 （第4回運営委員会）	作品搬入 審査（会員賞選考） 審査（準会員・公募） 第3回理事会 （第4回運営委員会）	東京都美術館
1・1・19 1・22 1・20	講演会 席上揮毫 作品解説（未定）	初日 学生選抜展（高校生の部） 授賞式及び昼食会 授賞式、祝賀懇親会 最終日	上野精養軒
1・27	第4回理事会 （第5回運営委員会） 第3回事務局・部長会議	作品搬出	東京都美術館
3・12	第4回理事会 （第5回運営委員会） 第3回事務局・部長会議	第63回太玄会書展総括 （併催第6回学生選抜展） 第64回太玄会書展 第65回記念太玄会書展について	上野精養軒
4・17	会計監査 令和4年度定期総会		上野精養軒

令和3年度 役員構成

名誉顧問 梅原 清山

常任顧問 福田 丞洲 田中 鳳柳 笠原 聖雲

董 事 垣内 楊石

鈴木 映華 瀧沢 曲峰 小原 天簫

伊東 玲翠 高橋 心行

会 長 石川 流芳

副 会 長 西村 東軒 落野 雅宣

理 事 長 宮負 丁香

副 理 事 長 金丸 鬼山 伊場 英白

事 務 局 長 小出 聖州

副 事 務 局 長 江原 見山 大場 大幹 下谷 蘊雪

飛田 冲曠

運 営 委 員 石川 流芳 西村 東軒 落野 雅宣

宮負 丁香 金丸 鬼山 伊場 英白

小出 聖州 江原 見山 大場 大幹

下谷 蘊雪 飛田 冲曠 海野 十方

垣内 蘭畦

理 事 ・ 総 務 石島 廻山 遠藤 有翠 木全 珠香

監 事 小林 紫雲

志村 恵風

理事・実行委員

植木 蒼穹 鎌田 龍祥 中尾 勝子
中田 珪川

會田春燕 浅香麗芳 足達紫鳳 新井清玉

荒井湧山 石井蕙園 石井珠翠 石坂翔鳳

伊藤慈恩 菴澤幸楓 植村曉恵 江原紫光

大河原由佳 大窪昇鶴 大森鳳城 笠井津仙

柏原桂雪 片倉道子 亀ヶ谷深翠 川端敏江

倉持栄秋 黒川白嶺 黒田桂泉 小泉香園

小泉興起 小林碧桃 小山泰雲 近藤寿泉

笹井芝雪 佐々木恵陽 佐々木幸葉 嶋田白染

清水美代子 須田瑞兆 清宮白鷺 高山爽快

滝澤聖華 田中恵康 田中柳惲 田村昇鶴

柘植金鶏 時田大祥 富山虎跑 鳥越新芽

中元泰乘 並木金紫 南部碧章 西澤厚子

西谷香峰 橋本春溪 長谷川溪華 長谷川香壽

落野祐涯 吹原草扇 藤岡悠苑 堀越壽品

前川郷石 増永楊蘭 南 溪石 三根揚輝

宮嶋吾風 宮本芳秀 村松鳳襟 望月擁山

山口香葉 山崎翠嵐 山崎洋子 山本白鷗

吉田恵子 吉村清志

理事

青木芳濤	天寺雅良	池田紅華	石井瑗泉
石井滯翠	石黒自耕	板垣芳蘭	板倉建昇
市川志玉	伊藤氣雪	伊藤紫粹	伊藤桐花
伊藤遙山	岩井壹龍	宇野静香	馬居李帆
遠藤鈴響	大木暁峰	太田芳琴	大竹伯燿
大畑晃翠	岡崎翠晃	尾崎清爽	小田堤翠
小野敏之	垣内玉華	垣内蘭畦	勝又慶竹
加藤径石	嘉門瑤泉	川上白鳳	川谷淳子
川津恵鮮	川名僊苑	川本景月	菊野白濤
窪田好華	倉田桂華	倉持茜祥	栗田伯陽
黒川虚白	小林嶺風	小林桂葉	小林まさ子
小宮柳岱	小山君代	齋藤清華	佐藤北峰
下島東僊	下原春美	下村清子	白崎信園
末永照英	杉浦華英	杉本英華	杉本雅峰
鈴木春畦	鈴木恵理	鈴木竹園	関根晁香
妹尾敏子	高橋興舉	高橋心華	宝田曉蓮
竹内游月	田中華苑	田中盛觀	田辺水月
谷本藍泉	田村麦浪	田村史子	坪川九翠
内藤秋麗	中垣郁芳	中西甫子	中森茶月
西岡虹舟	新田白楊	長谷川流祥	花澤雙鴻
林 幸恵	林 韶舞	林 賢子	羽山多望
原田彩翠	日置雅有	備前 徹	弘田長風

第62回太玄会書展 入賞または社中の推選による昇格者

第62回太玄会書展入賞による理事へ8名

天寺雅良 尾崎清爽 川名僊苑 倉持茜祥 小林まさ子 妹尾敏子
備前 徹 森 鶉石

審査会員へ8名

大木操守 小俣柏翠 釜田 響 川井韶瑞 中島翠霽 舛田白露
柳沢桑風 山田松陽

落野研涯 福田節子 藤田冠山 古谷善子
星野遙涯 細田耕仙 堀 桃泉 本間杏雪
真岸京湖 松尾蘭月 松口翠葉 松田爽花
松橋多恵 御園生溪鳳 三岡翠風 皆川蘭香
宮原真玄 三好凌香 村上觥舟 森 鶉石
山内紀隆 山口杏園 山口古艸 山崎寛齋
山崎琇園 山地暁翠 山下玉水 山田光倫
山田騰沸 山本皓月 湯浅瑞雲 横山恵華
吉田景雲 渡辺玲雲

会員へ23名

菴澤御櫻 上村高子 牛口仙桃 宇多川翠扇 内田黄鳥 江澤とし子
 榎本華艶 大河原佳奈 大坂八知枝 掛川和光 方波見草子 草間清晨
 清水嶺花 菅谷弘麗 鈴木美晃 田中さち子 西村果仙 増井紅翠
 宮澤溪翠 村上静竹 山田香雪 油井謙輝 吉本余榮

準会員へ33名

荒井桃子 瓜田余響 風間翠泉 片山廣楓 川島遙青 川畑美風
 櫻井慧酔 櫻田明道 眞田星鳥 塩澤智加 清水亨鶴 鈴木光濟
 高橋翠嶺 田村游古 長橋葉鴿 南雲鷺草 奈良京華 膝附桐穂
 福島征英 松野浩範 矢田貝恭子 吉田 愛

令和3年 事務局構成

事務局長 小出 聖州

副事務局長 江原 見山 大場 大幹

下谷 蘓雪 飛田 冲曠

会計部 山口 香葉

事業部 路野 祐涯

広報部 荒井 湧山

渉外接待部 石井 蕙園

図録部 小林 碧桃

搬入出部 江原 紫光

審査事務局 山村 鳳羽

陳列部 伊藤 慈恩

褒賞部 小泉 興起

祝賀会部 大河原 由佳

学生部 鳥越 新芽

令和4年度 総会

日時 令和4年4月17日(日) 15時開始
会場 上野精養軒 (司会・大場大幹)

次第

- 一、 定足数の確認 (飛田冲曠) (615) 出席82名 (委任状480名)
- 一、 開会の辞 (路野雅宣)
- 一、 常任顧問挨拶
- 一、 会長挨拶 (西村東軒)
- 一、 議長選出 (宮負丁香)
- 一、 書記任命 (小林碧桃・路野祐涯)
- 一、 議 事
 - (1) 令和3年度 事業報告 (小出聖州)
 - (2) 令和3年度 決算報告、会計監査報告 (山口香葉・小林紫雲)
 - (3) 令和4年度 事業計画案について (小出聖州)
 - (4) 令和4年度 予算案について (山口香葉)
 - (5) 電算部の新設について (小出聖州)
 - 会員データの保存並びに更新に係る事項
 - H P の更新に係る事項 他
 - (6) 役員改選について (小出聖州)
 - (6) その他 新実行委員、新理事会員、新審査会員の紹介 (小出聖州)
- 一、 書記退任
- 一、 議長退任
- 一、 閉会の辞 (伊場英白)

令和3年度 事業報告書

年月日	会議・事業等	会議・事業内容等	会場
3・4・18	第1回運営委員会 第1回理事会 令和3年度定期総会	一部役員改選の確認 令和2年度事業報告 決算報告、監査報告 令和3年度事業計画案 及び、予算案の審議 一般社団法人への移行について その他 懇親会(中止)	上野精養軒
6・23	第1回理事会 (第2回運営委員会) 第1回事務局・部長会議 第2回事務局・部長会議	第63回太玄会書展 (併催第6回学生選抜展)	上野精養軒
10・6	搬出入部 12・7迄に郵送又は宅配	第63回展書類搬入	搬入出 部長住所
12・7	第2回理事会 (第3回運営委員会) 第1回理事委員会 (第2回理事会)	忘年懇親会	上野精養軒
12・12	第63回太玄会書展 (併催第6回学生選抜展)	作品搬入	東京都美術館
4・1・7	第63回太玄会書展 (併催第6回学生選抜展) 1・20(日)17:30-26 9・30(月)開館 1・24(月)上演 講演会・席上揮毫 ・作品解説(未実施)	審査(会員賞選考) 審査(準会員・公募) 第3回理事会 (第4回運営委員会) 陳列 初日 学生選抜展(高校生の部) 授賞式及び昼食会(中止) 授賞式 祝賀懇親会(中止) 最終日 作品搬出	上野精養軒
1・1・26	第4回理事会 (第5回運営委員会) 第3事務局・部長会議	第63回太玄会書展総括 (併催第6回学生選抜展)	東京都美術館
1・23		第64回記念太玄会書展について	上野精養軒
3・12	会計監査		上野精養軒
4・5	令和4年度社員総会		上野精養軒

第63回太玄会書展（併催第6回学生選拔展）出品状況

☆総出品点数 1,170点

22	名誉顧問 常任顧問 董事 運営委員
7	総務 監事
63	理事 実務委員
104	理事 審査員
86	正会員
114	準会員
145	公募
159	学生
470	

第63回太玄会書展入賞状況

5	太玄 大賞
4	太玄 賞
4	全日本 書道 連盟賞
5	特別 賞
4	奨励 賞
11	新人 賞
20	推選
45	準推選
31	特選
63	準特選
65	入選
456	学生 入選部

※入場者数 1,395名

事務局各部活動状況報告

◎事務局（担当 副事務局長 江原見山 大場大幹 下谷蘊雪 飛田冲曠）

3 定期総会実施、役割分担の打ち合わせ

6 令和3年度会員名簿発行、

第63回太玄会書展実施に向けての打ち合わせ

10 第63回太玄会書展詳細の検討

理事会、理事会員会議、忘年懇親会への通知

一般社団法人移行に伴う案内はがきの発送

7 11 牧野商会及び空間堂への第63回太玄会書展の依頼と打ち合わせ

合わせ

12 本展会場打ち合せ 会場当番の計画と依頼 総会会場打ち合わせ

合わせ

4 1 第63回太玄会書展の開催

2 令和4年度社員総会の通知の発送と集計

3 第63回太玄会書展図録の来賓等各位への送付

※年間に開催される理事会、理事会員会議、部長会、総会等会議の連絡事務

※報道関係（本展作品）（年鑑、広告）掲載に係る業務

※住所変更、退会届等受付処理業務

※本展の後援等に係る外部団体との連絡・折衝

※本展の後援等に係る外部団体との連絡・折衝

◎会計部（担当 山口香葉）

3 4 令和2年度の会計監査に向けて仕訳帳等の整理準備

令和2年度の決算書、令和3年度の予算案作成

令和2年度会計監査受検

令和2年度決算書、令和3年度予算案報告

5 令和3年度会費納入に関する依頼書等を各社中に送付

6 令和3年度納入会費の整理入力、領収書作成依頼

9 会費領収書を各社中へ送付依頼

10 第63回太玄会書展に関して各部の行動予定を把握、経費の算出及び資金の準備

11 学生表具料集計確認、公募出品料集計確認

12 第63回太玄会書展必要経費準備

4 1 第63回太玄会書展審査会における経費支払業務
第63回太玄会書展に関する経費支払業務

◎事業部（担当 落野祐涯）

3 6 風雅プランニングへ出品規定・全社中の名札（役職付）・賞札など依頼

7 風雅プランニングへポスター・ハガキなど全書類に関して送る・校正

初出品票を各社中へ発送

8 事務用品などの確認と整理

風雅プランニングから確認用の出品規定・出品票届く

各社中に公募の住所録（確認のため）送る

9 出品規定・出品票を各社中へ、又個人宛に送る

10 風雅プランニングから各社中・各業者へ書類発送、表具店へ側表の張り方確認

表具店へ側表の張り方確認

11 風雅プランニングから社中の名札・賞札届く

12 風雅プランニングへ初出品者の名札依頼

4 1 東京都美術館に備品搬入、備品の整理・購入、賞札の整理

精養軒に賞状・褒賞部依頼品など搬入
年間を通して封筒は各先生の依頼により郵送

◎広報部（担当 荒井湧山）

3 4 会報77号の編集基本方針の決定、原稿依頼
4 1 コロナ禍の影響のため、令和4年度に3年度との合併号発行の予定

年間を通してホームページの更新

◎渉外接待部（担当 石井蕙園）

3 9 事業部と案内状の確認

11 住所シールの作成

12 案内状の送付 1200枚

毎日書道会 85枚 産経国際書会 207枚

読売書法会 548枚 報道関係 24枚

業者 11枚 その他

4 1 授賞式受付（1/23）

年間を通して胸章リボンの保管

◎図録部（担当 小林碧桃）

第63回太玄会書展作品集の編集と発行

3 10 図録に係る基本方針の作成

4 1 作品撮影 367点 風雅プランニング

(審査会員以上282、会員受賞者20、準会員受賞者65)

編集 風雅プランニング

2 一回目、二回目の校正

図録発送先調査 発行部数と発送先の確認

3 図録発行

各社中事務担当者宛発送 風雅プランニング

◎搬入出部 (担当 江原紫光)

3 9 『第63回太玄会書展の書類送付に関する書類』(9/29)

(作品型式調査表・社中別出品数表・会計部より受領した払込取扱表) を各社中事務担当者に発送

2021年12月7日必着にて

1. 出品票 2. 出品者名簿 3. 内申名簿

4. 作品型式調査票 5. 社中別出品数表

6. 出品料払込金受領証(写)

7. 制作用図説明書(キャプション原稿)

12 受領した各社中提出書類を確認、整理

整理した書類に基づき

1. 社中別出品数表

2. 資格別作品出品数表

3. 公募出品料受領証を作成

整理した必要書類を各事務局部長に送付

(社中別出品表、資格別作品出品数表を同封)

学生部書類を学生部長に送付

『社中別出品数表』と『資格別作品出品数表』を60部コピーし、

理事会で配布

風雅プランニングへ名札作成のため『出品者名簿』を手渡し

搬入出部員に作品搬入日(令和4年1月7日)の作業を依頼

4 1 作品搬入の受付事務の実施(東京都美術館 地下3階)

・作品搬入の受付

・搬入数の確認・確定(表具店8社より持ち込み)

・役職別・社中別数の確認(社中別出品数表参照)

・出品目録・資格別作品出品数表・社中別出品数表の確定

・事務局長に報告後、審査事務局長に引き継ぐ

作品搬出の立会い実施(東京都美術館 地下3階)

・作品搬出の受付

・搬出数の確認・立会い(表具店8社の引き取り)

・事務局長へ報告

◎審査事務局 (担当 山村鳳羽)

3 12 第63回太玄会書展の書類搬入確認(12/12)

審査事務局処理について打ち合わせ

4 1 第63回太玄会書展審査事務局打ち合わせ、役割分担説明

(1/7)

審査手順、作品配置、成績処理について打ち合わせ

作品 700点確認 作品配置 審査場作成

出品者目録校正、入賞および入選者通知ハガキ準備

審査方法打ち合わせ、役割分担確認(1/8)

風雅プランニングと打ち合わせ

会員賞選考委員による審査

会員新人賞の選考審査

特別賞、奨励賞の選考審査

太玄賞、全日本書道連盟賞の選考審査

太玄大賞の選考審査

入賞者代表謝辞選出

高校生の部選考審査

選考委員及び当番審査員による審査(1/9)

推選、準推選、特選、準特選、入選の選考審査

入賞及び入選者通知ハガキ作成、発送

作品管理、成績名簿作成

褒賞部へ連絡

◎陳列部 (担当 長谷川香濤)

3 10 各社中事務担当者へ、陳列社中動員依頼文書を送付

12 搬入出部より社中別出品者名簿・作品型式調査票を受け取り、

出品者数・作品型式等を確認

学生部の作品点数を確認

牧野商會に出品点数(700点)を連絡し見積もりを依頼

4 1 風雅プランニングへ陳列名簿原稿作成を依頼
陳列部副部長・委員に陳列関係書類を送付

審査部より審査結果を受領・確認

風雅プランニングより陳列名簿原稿を受領

陳列計画案を作成

牧野商會担当者、陳列部副部長と打ち合わせ

陳列日…陳列人数53名 15時陳列終了

会期中…会場見取り図を追加配置

最終日…陳列部委員12名 15時会期終了後、名票等の撤去及

び反省会を行った

◎褒賞部 (担当 小泉興起)

3 12 部長、副部長との打ち合わせ(12/12)

精養軒との打ち合わせ(12/12)

書類の作成・整理・確認、事務用品の確認と補充

松下徽章へ賞品のメダル発注

事業部へ賞状の発送依頼(揮毫者宛)

4 1 審査終了後、受賞者の確認(1/9)

代表受賞者のお願い、精養軒との打ち合わせ(1/9)

授賞式出席者名簿の作成

各社中へ発送する賞状、賞品等の一覧表を作成

賞状の揮毫、確認

賞状・賞品等各社中へ発送(1/23)

授賞式会場設営、授賞式運営（1／23）

◎祝賀会部（担当 大河原由佳）

3 11 各社中事務担当者に書類を送付（11／23）

「第63回太玄会書展祝賀懇親会について」

「祝賀懇親会記入用紙」、「会費振込用紙」

着席 1卓5～8名 コース料理の予定

12 精養軒担当者と打ち合わせ

4 1 祝賀会部員に、打ち合わせ・業務等の書類を送付（1／4）

急速なコロナウィルス感染拡大により、祝賀懇親会の中止が決定（1／9）

「第63回太玄会書展祝賀懇親会中止のお知らせ」を各社中祝賀会担当者、祝賀会部員に送付

祝賀会費を納入済み社中へ、会計部長より全額返金（1／19）

◎学生部（担当 鳥越新芽）

3 9 第6回学生生選抜展 小・中学生、高校生の出品要項他 書類を13社中宛て発送

12 書類搬入、出品一覧表、表具料振込コピーを搬入出部長より受け取る

学年別出品点数確認（高校生（70点）、中学生（14点）、小学生（259点） 計470点）

入選者名一覧、高校生の名札を風雅プランニングへ発注

4 1 搬入日 作品点数確認 学年別仕分け

陳列日 小・中学生の部、学年別に3段掛けで展示

23・24室使用

証発送 各社中宛て入選証、入選者氏名一覧仕分け（高校生

一部賞状を含む）

発送業務は褒賞部に依頼

最終日 15時より撤去作業

令和4年度 事業計画表

年月日	会議・事業等	会議・事業内容等	会 場
3・4・17	第1回理事会 第1回理事会会員会議 令和4年度定期総会	一部役員改選の確認 令和3年度事業報告 決算報告、監査報告 令和4年度事業計画案 及び、予算案の審議 その他 懇親会（中止）	上野精養軒
6・22	第2回理事会 第1回事務局・部長会議	第64回太玄会書展 （併催第7回学生選抜展）	上野精養軒
10・5	第2回事務局・部長会議	第64回太玄会書展 （併催第7回学生選抜展）	上野精養軒
12・6	搬入部 12・6迄に郵送又は宅配	第64回太玄会書展書類搬入	搬入出 部長住所
12・11	第3回理事会 第2回理事会会員会議	第64回太玄会書展 （併催第7回学生選抜展） 忘年懇親会	上野精養軒
5・1・7 1・9・8 1・1・20 1・21・19	第64回太玄会書展 （併催第7回学生選抜展） 1・20・1・26 9・30・17・30 1・23（月）開館 講演会・席上揮毫 ・作品解説（未定）	作品搬入 審査（会員賞選考） 審査（準会員・公募） 第4回理事会 陳列 初日 学生選抜展（高校生の部） 授賞式及び食事会 祝賀懇親会 最終日 作品搬出	東京都美術館 上野精養軒
1・22		授賞式	上野精養軒
1・26		作品搬出	東京都美術館
3・11	第5回理事会 第3回事務局・部長会議	第64回太玄会書展総括 （併催第7回学生選抜展） 第65回記念太玄会書展について	上野精養軒
4月上旬	会計監査		上野精養軒
4・16	令和5年度社員総会		上野精養軒

令和4年度 役員構成

名譽顧問	常任顧問	董 事	会 長	副 会 長	理 事 長	副 理 事 長	事 務 局 長	副 事 務 局 長	運 営 委 員	監 事								総 務
梅原 清山	福田 丞洲	石川 流芳	鈴木 暎華	伊東 玲翠	西村 東軒	露野 雅宣	伊場 英白	小出 聖州	下谷 蘊雪	江原 見山	西村 東軒	金丸 鬼山	飛田 冲曠	大場 大幹	伊藤 慈恩	志村 恵風	石島 廻山	中尾 勝子
	笠原 聖雲		瀧沢 曲峰	高橋 心行		宮負 丁香		飛田 冲曠		大場 大幹	露野 雅宣	伊場 英白	下谷 蘊雪	海野 十方		小林 紫雲	植木 蒼穹	中田 珪川
	垣内 楊石		小原 天簫			金丸 鬼山				伊藤 慈恩	宮負 丁香	小出 聖州	江原 見山	垣内 蘭畦		鎌田 龍祥		

実行委員

會田春燕 浅香麗芳 足達紫鳳 新井清玉

荒井湧山 石井蕙園 石井珠翠 石坂翔鳳

菴澤幸楓 植村曉恵 江原紫光 大河原由佳

大窪昇鶴 笠井津仙 柏原桂雪 片倉道子

亀ヶ谷深翠 川端敏江 倉持栄秋 黒川白嶺

黒田桂泉 小泉香園 小泉興起 小林碧桃

小山泰雲 近藤寿泉 笹井芝雪 佐々木恵陽

佐々木幸葉 嶋田白染 清水美代子 須田瑞兆

清宮白鷺 高山爽快 滝澤聖華 田中恵康

田中柳惲 柘植金鶏 時田大祥 富山虎跑

鳥越新芽 中元泰乘 並木金紫 南部碧章

西澤厚子 西谷香峰 橋本春溪 長谷川溪華

長谷川香濤 露野祐涯 藤岡悠苑 堀越壽崑

前川郷石 増永楊蘭 南 溪石 三根揚輝

宮嶋吾風 宮本芳秀 望月擁山 山口香葉

山崎翠嵐 山崎洋子 山本白鷗 吉田恵子

吉村清志

理事会員

青木芳濤 天寺雅良 池田紅華 石井瑗泉

石井滲翠 石黒自耕 板垣芳蘭 板倉建昇

市川志玉 伊藤紫粹 伊藤桐花 伊藤遙山

岩井壹龍 宇野静香 遠藤鈴響 太田芳琴

大竹伯耀 大畑晃翠 岡崎翠晃 小田堤翠

小野敏之 垣内玉華 勝又慶竹 加藤径石

嘉門瑤泉 川上白鳳 川谷淳子 川津恵鮮

川名僊苑 川本景月 菊野白濤 窪田好華

倉田桂華 倉持茜祥 栗田伯陽 黒川虚白

小林まこ子 小林嶺風 小宮柳岱 小山君代

佐藤北峰 下島東僊 白崎信園 末永照英

杉浦華英 杉本英華 杉本雅峰 鈴木恵理

鈴木春岨 鈴木竹園 関根曉香 妹尾敏子

高橋興舉 高橋心華 宝田曉蓮 竹内游月

田中華苑 田中盛觀 田辺水月 谷本藍泉

田村史子 坪川九翠 内藤秋麗 中垣郁芳

中西甫子 新田白楊 長谷川流祥 林 韶舞

林 賢子 羽山多望 原田彩翠 日置雅有

備前 徹 弘田長風 露野研涯 福田節子

藤田冠山 古谷善子 星野遙涯 細田耕仙

堀 桃泉 本間杏雪 松尾蘭月 松口翠葉

松田爽花 松橋多恵 御園生溪鳳 三岡翠風

皆川蘭香 宮原真玄 村上航舟 森 鶉石

山内紀隆 山口古艸 山崎寛齋 山崎琇園

山地曉翠 山田光倫 山田騰沸 湯浅瑞雲

横山恵華 吉田景雲 渡辺玲雲

第63回太玄会書展 入賞または社中の推選による昇格者

役員改選に伴い副事務局長として理事へ1名

伊藤慈恩

第63回太玄会書展入賞による理事会員へ5名

大木操守 尾崎清爽 小林桂葉 三好凌香 山口杏園

審査会員へ5名

牛尾雅高 鈴木景子 細渕金杏 松井芙蓉 山崎のり子

正会員へ13名

阿部弘信 石井白玲 加藤暉川 鎌形美容 栗原紫翠 国分滋潤
佐藤蒼艶 佐原美酔 杉山早霞 高橋紅葩 平野渚秋 古澤双葉
増渕香泉

準会員へ12名

大山紫彩 木下正覚 小杉恵美子 佐々木啓春 佐々木芳華 佐藤優衣
鈴木花仙 徳永慈峽 豊嶋智勇 深川兆瑤 堀江直美 山田緑水

令和4年 事務局構成

事務局長	下谷 蕪雪	
副事務局長	江原 見山	大場 大幹
伊藤 慈恩		
会計部	山口 香葉	
事業部	落野 祐涯	
広報部	荒井 湧山	
渉外接待部	石井 蕙園	
図録部	小林 碧桃	
搬入出部	江原 紫光	
審査事務局	伊藤 慈恩	
陳列部	長谷川 香壽	
褒賞部	小泉 興起	
祝賀会部	大河原 由佳	
学生部	鳥越 新芽	
電算部	望月 擁山	

太玄会所属団体のこの一年の活動（令和2年4月～令和3年4月）

書 星 会

第68回書星展「他4展」

会 期 令和2年7月～令和3年1月

会 場 書星会本部

代表者 宮 貞 丁 香

コロナの影響で、第68回書星展は東京都美術館における展覧会を中止し、作品集の誌上展としての実施となった。

その他の各展も展覧会場における実施が悉く見送られ、誌上展形式や延期という事態となった。

そのような中で、第73回千葉県小・中・高校書き初め展覧会の中央審査を書星会本部で行った時の写真を掲載する。



菅 菰 会

菅菰役員書展

会 期 令和2年8月25日(火)～8月28日(金)

会 場 東京芸術劇場 地下1階アトリエウエスト

代表者 石 川 流 芳

コロナ禍で多くの書展が中止になり、読売展までもが延期になる中、石川会長の発案により、池袋の東京芸術劇場の地下で菅菰役員書展を開催しました。厳しい状況の中でしたが多数のご来場をいただき、4日間の開催は成功裡に無事終了いたしました。



第57回菅菰書展 併催 全国学生展

会 期 令和3年3月2日(火)

3月7日(日)

会 場 東京都美術館

代表者 石川 流 芳

非常事態宣言中に開催された第57回菅菰書展。コロナ対策も万全にして来場者を迎えました。今回1室の役員はいつもの2×8を、3×10、4×6等の壁面に負けない大作で挑みました。全体に迫力があり、好評の様子でした。また、祝賀会や授賞式、学生部の授賞式も中止にせざるを得ない中でも最終の土日は親子での来場が相当数いらして盛況でした。来年こそは元通りの展覧会にしたいものです。

第57回 菅菰書展
併催 全国学生展
令和3年3月2日(火)～3月7日(日)
特別企画
「国語科学習成果展覧会」
（最優秀の作品は平成29年度以来、平成30年度まで）
入場無料
会場/ 東京都美術館（本館5階）
二階第二展示室
上記の会期中に開催される予定です。
同中・高の各校よりご来場いただきご来場料を上げます。
なお、ご来場の際はご来場料をいただく場合があります。
石川 流 芳
本展 展覧会費 500円（税別）～2,000円
（税別）
主催 菅菰書展実行委員会
後援 東京都教育委員会 東京都新聞社
読売新聞社



研友社

第33回研友社展（誌上展）

会 期 令和2年7月15日(水)～7月19日(日)（中止）

会 場 「研友」誌上

代表者 田中 鳳 柳

毎年恒例となっていた「銀座かねまつ画廊」での第33回研友社展は、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、雑誌「研友」上での紙上展となっていました。紙上展には、53名が出品し、研鑽を重ねた1年間の成果を発表した。



真仙会

第54回真仙会書道展

会 期 令和3年5月14日(金)

5月18日(火)

会 場 長野東急百貨店

シエルシェ5階ホール（長野市）

代表者 小出 聖 州

昨年開催を中止、2年ぶりの開催となった第54回真仙会書道展は5月14日から18日まで長野市のながの東急百貨店シエルシェ5階ホールで開かれました。

真仙
第54回
真仙会書道展
併催 第41回武仙会書道展
会 期 令和3年5月14日(金)～18日(火)
今夏1000～1500部印刷予定の500部限定
会 場 ながの東急百貨店 別館シエルシェ5階ホール
（入場無料）
ご来場お待ちしております。
主催 真仙会
後援 長野市、長野県教育委員会、長野県書道協会
長野県新聞社
（ご来場の際はご来場料をいただく予定です）

54回展

の出品点
数は140点。
開催前日
の展示作
業は表装
業者を中
心に少人
数で短時
間のうちにスムーズに完了しました。期間中ギャラリートークなども中止しましたが、来館者は時間をかけ、ゆっくり見ている人が多かった作品展でした。



作品を見る人たち



学童の作品を見る出品者

鳥跡会

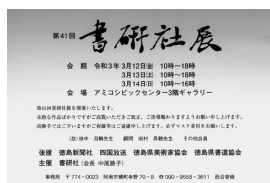
書研社

第41回書研社展

会期 令和3年3月12日(金)～3月14日(日)

会場 アミコシビックセンター
3階ギャラリー(徳島市)

代表者 中尾 勝子



コロナ禍の中、開催するかどうか悩みましたが、万全の対策をして実施に踏み切りました。昨年は記念すべき第40回展でしたが、四囲の状況から開催を断念し、作品集のみの誌上展としました。

第41回展では、40回展の作品を使った人、新しく書き直した人等々

まぎまでしたが、作品を発表できたことに大きな喜びを感じました。会員25人が仮名、漢字調和体、臨書等50点。小中高校生の作品15点、会員による共同作品(漢字、仮名の臨書作品)20点を展示しました。



歌の会

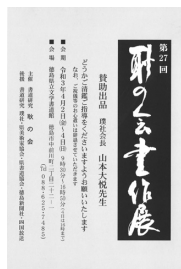
第27回歌の会書作展

会期 令和3年4月2日(金)

～4月4日(月)

会場 徳島県立文学書道館

代表者 弘田 長風



昨年は、新型コロナウイルスのため開催ができなかった。

今年は、消毒や検温等の対策をとり開催することができた。会員24名が46点出



品し、錬成の成果とした。恒例の共同作品は、カラフルなスタンプのついた葉書ほどの大きさの画用紙に会員が好きな言葉を書いた。学生の部には、93名が毛筆と硬筆を出品した。

環社会長 山本大悦先生に賛助いただき盛況のうちに終えることができた。

九龍社

九龍社研修会

会期 令和2年9月20日(日)

11月15日(日)

会場 ふれあいみんなの館・さばえ

代表者 垣内 楊 石

新型コロナウイルスの流行で、例年6回行っていた九龍社研修会是一部中止となり、3回しか実施することができませんでした。しかも、昼食を避け



午前中のみの研修会となりました。それでも、ステイホーム中に書いた臨書作品を持ち寄っての研修では、垣内先生の講評を聞くことによつて様々なことを学ぶことができました。また添削やアドバイスを受け、各々にとつて貴重な研修の場となりました。

高友社

第42回高友社書展(学生展併催)

会期 令和3年4月15日(木)

4月19日(月)

会場 上野の森美術館1階

代表者 路野 雅 宣

令和3年4月15日～19日まで、2年ぶりの高友社書展を開催しました。昨年は3月中旬、作品の仕上がり直後に開催中止が決定され、残念な思いをいたしました。今回は心機一転、1年の充電期間を経てパワーアップした作品が集まりました。

コロナ禍もあり、来場者数を心配しましたが、好天にも恵まれ、約

第42回
高友社書展
(学生展併催)

ご覧覧のりたくてご案内申し上げます。

会期 令和3年4月15日(木)～4月19日(月)
午前10時～午後5時(最終日は2時迄)

会場 上野公園内・上野の森美術館1階
TEL.3833-4191

主催 高友社
上野の森美術館
後援 毎日新聞社

	15(木)	16(金)	17(土)	18(日)	19(月)
午前					
午後					

(注)の会場内は、
観覧料 観覧料(学生・高齢者) 400円
(観覧料として200円返金)
(二日連続観覧料は1000円)



800名の皆様にご来場いただき、会場内は例年と変わりがなく歓談の輪が広がりました。太玄会の先生方にも多数ご来場いただき、有難うございました。心より御礼申し上げます。

青龍会

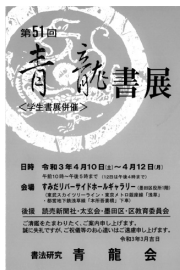
第51回青龍書展（学生書展併催）

会期 令和3年4月10日(土)

～4月12日(月)

会場 すみだりバーサイドギャラリー

代表者 下谷 蕪雪



昨年の50回記念展は、コロナ禍の為会場使用禁止となり誌上展に切

り替えて行いました。

今回51回展は緊急事態宣言発出直前に何とか開催することが出来ました。色々対策に制約がありました。予想以上の観覧者があり「ホッ」としました。土曜、日曜は学生部の親子連れで密を心配する程でした。

コロナ禍で外出するのも大変な中、来客を迎えご指導をいただいた事も収穫の一つとなりました。ご指導いただいた先生方には心よりお礼を申し上げます。

また、昨春秋に他界した佐藤会長の遺墨コーナーは先生らしい作品が並び、お弟子さんによる生け花も趣きを添えました。



太玄会所属団体のこの一年の活動（令和3年5月～令和4年4月）

書 星 会

第69回書星展

会 期 令和3年11月10日(水)～11月16日(火)
会 場 東京都美術館
代表者 宮 負 丁 香

前回の第68回展は、コロナの影響で展覧会を都美術館で行えず、作品集のみの誌上展の形であったが、今回第69回展は、東京都美術館でコロナ禍の開催となった。お陰様で、二千名を超える入場者を数え、作品599点、課題折帖65点の展示となった。

房総に生きた書家 浅見錦龍生誕100年展

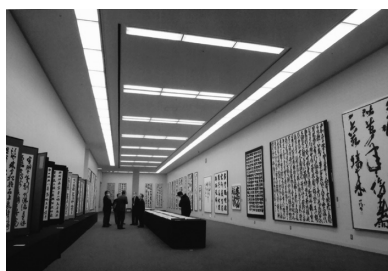
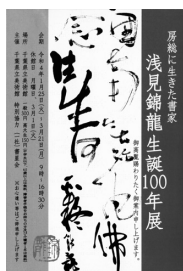
会 期 令和4年1月25日(火)

（3月21日(月)）

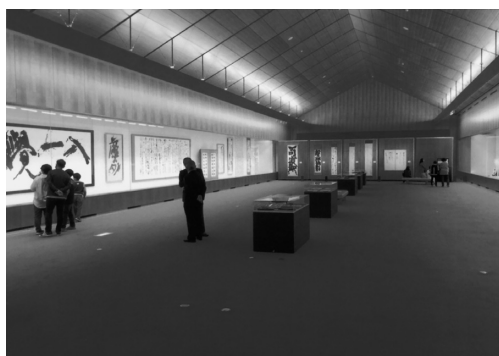
会 場 千葉県立美術館
代表者 宮 負 丁 香

約二カ月間に亘り開催され、コロナ禍であったが約8千人の入場者であった。

10代頃の作品から、様々な年代の多様な表現の作品・印・筆・硯・



草稿や出版物と錦龍の書業をたっぷりと味わうことのできる展覧会であった。



菅 菰 会

第58回菅菰書展 併催 全国学生展

会 期 令和4年3月1日(火)～3月6日(日)
会 場 東京都美術館
代表者 石 川 流 芳

2月頃ちょうどオミクロン株が蔓延している最中、開催も危ぶまれ



第58回菅菰書展ですが、授賞式や祝賀会は中止としましたが、展覧会は無事開催でき、前回から特別企画として行っている選抜若手育成臨書作品のコーナーも大変ご好評を頂きました。また学生展も大勢が来館され盛況裡に閉会出来ました。

次回展こそ通常の展覧会に戻ることを切に願っております。



書王社

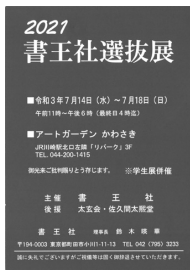
書王社選抜展

会期 令和3年7月14日(水)

～7月18日(日)

会場 アートガーデンかわさき

代表者 鈴木 映華



研友社

第34回研友社展

会期 令和3年9月29日(水)

～10月4日(月)

会場 銀座かねまつホール

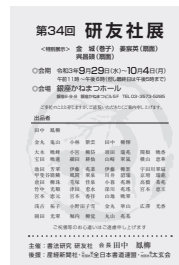
代表者 田中 鳳柳

毎年暑い時期の開催ですが、出品者一同書体や紙色等に工夫をこらして涼しげで明るい会場風景となりました。連日、沢山のお客様を迎えて大いに賑わいました。学生展も、意欲作が並び御家族の皆様喜んでいただきました。太玄会からも、多数の先生方に御来場いただきお陰様で盛会裡に終了しました。誠にありがとうございました。

第34回研友社展は、令和3年9月29日から10月4日まで「銀座かねまつホール」で開催しました。会員諸氏38名は、一年間積み上げてきた研鑽の成果としての作品を会場壁面一杯に発表することができました。

ただ残念なことに、田中鳳柳会長は体調を崩され、いつものように会場中央で太玄会の役員の方々や来場者と楽しく懇談をする姿が見られなかったのは、寂しい限りでした。

田中鳳柳会長は、研友社展終了後



の11月3日に黄泉の途へと旅立たれましたが、会長の言葉である「古典の稽古を怠ることはできない。古典臨書を主張し続け、古典を味方に新しい展望を切り開く」を常に念頭に置きながら、会員一同これからも精進してまいります。

錬成会

会 期 令和3年4月及び7月

会 場 鷺毛堂錬成会場（浦和）

代表者 田 中 鳳 柳

研友社では、錬成会を春と夏の2回、浦和の鷺毛堂錬成会場を借用して開催しております。

4月は産経国際書展に向けて、7月は研友社展や太玄展に向けての作品制作を中心として実施しています。

錬成会は、普段研友紙上でしか知れない各支部先生方の交流の場にすると共に幹部の先生から、朱を入れて頂くことのできる貴重な機会でもあります。また、結構や章法などの知識や作品制作上のノウハウを修得できる好機ですので、今後も継続して実施して行く予定です。



真仙会

第55回記念真仙会書展

会 期 令和4年5月13日(金)

5月17日(火)

会 場 ながの東急百貨店

代表者 小 出 聖 州

今年の展示はワンフロア全部を使つての展示で、ゆったりとした飾り付けが特徴でした。

会期中に総会を開き、引き続き懇親会を計画していましたがコロナで中止。

今年は55回を記念して図録を発刊しました。A4判で1ページに3点の掲載で大きく見やすいようにしたのが特徴です。



第五十五回記念 真仙会書道展作品集



鳥 跡 会

書研社

第42回書研社展

会 期 令和4年3月25日(金)～3月27日(日)

会 場 アミコシビックセンター
3階ギャラリー(徳島市)

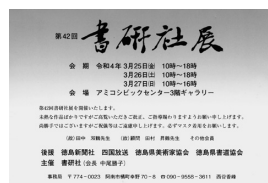
代表者 中 尾 勝 子

書研社は、故 田中双鶴先生が創設、育成された書道結社です。毎年一回社中展を行っています。

今年は23名の会員が1人2点(原則漢字1点仮名1点)46点の作品と臨書作品(半紙大、各人1点)、学生の作品と共に展示した。漢字、仮名、調和体、一字書等バラエティに富んだ書展となりました。

特筆すべきは、長年書研社の顧問として指導、索引して下さった田村昇鶴先生が亡くなられたことです。

ご冥福をお祈り申し上げます。



鳥跡会合同錬成会

会 期 令和3年10月3日(日)

会 場 春日会館

代表者 中 尾 勝 子

鳥跡会は歌の会、一心会、書研社の三つの社中が集まって年一回合同錬成会を行っています。当初9月を予定していましたが、コロナの感染拡大により10月3日に延期。マスク着用、充分間隔を空けて錬成をしました。

歌の会

第28回歌の会書作展

会 期 令和4年4月1日(金)

～4月3日(日)

会 場 徳島県立文学書道館

代表者 弘 田 長 風

今回もたくさんの方々にご来場いただき、盛況のうちに第28回歌の会書作展を終えることができました。毎回、会員全員で一つのテーマに取り組んでいます。今回は扇面の色紙を使つての作品作りでした。個々に漢字や漢字仮名交じり文を自分なりに表現し、華やかな壁面となりました。



九龍社

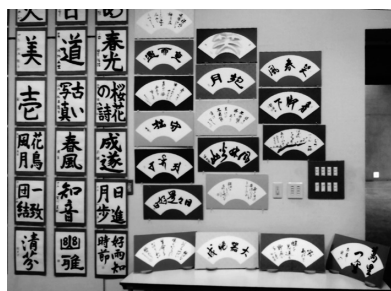
第61回九龍社書展

会期 令和3年11月11日(木)

11月14日(日)

会場	福井県立美術館
代表者	垣内 楊 石

上、最優秀賞として設けられた「オリンピック記念賞」をはじめ34点の入賞が決められました。中学生以下の学生部には305点の応募があり、特選以上の183点が展示されました。



表彰式は新型コロナウイルス感染予防の為、入場制限をしながら3回に分けて盛大に行われました。

九龍社研修會

会期 令和3年7月24日(土)

11月21日(日)

会場 ふれあいみんなの館・さばえ

代表者 垣内 楊石

新型コロナウイルス感染の流行の為、一部中止になったり会場の変更を余儀なくされましたが、年間を通じて4回の研修会を実施することができました。

午前中のみの短い時間でしたが、垣内楊石先生による、会員の臨書作品の研修会や作品の鑑別、アドバイス、添削等充実した研修会が行われました。

参加者にと
って、新たに
目標を定めて
作品制作の意
欲を持つ良い
機会となつて
いました。



高友社

第43回高友社書展（学生書展併催）

会期 令和4年4月15日(金)

4月19日(火)

会場 上野の森美術館1階

代表者 落野雅宣

多くの御来臨を賜り、和やかな充実した時間を頂きました。

篆刻など会員各々の自己

表現を尊重した80点の個

性豊かな作品が並びまし

た。学生展も136点の参加で

壁一面に軸装が美しく飾られ、その力作の前で多くの家族が歓談する場面が見られました。



第34回
高友社展
(学生展併催)

ご高覧賜りたくご案内申し上げます。

会 期 今年4月14日(月)～4月19日(火)
午前10時～午後3時(最終日は3時迄)

会 場 上野公園内上野の森美術館1階
TEL.3833-4191

主 催 高 友 社
上野の森美術館

後 援 毎日新聞社

午前	15(金)	16(土)	17(日)	18(月)	19(火)
午後					

《展覧の企画協力団》

東京大学 美術部 美術史学系 40・5
東京大学 文学部 国文学系 40・5
(ご覧はぜひお二人以上で)

第56回療原社書展

会期 令和3年9月11日(土)

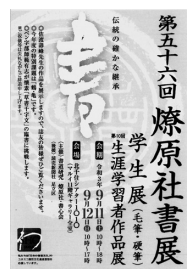
～9月12日(日)

会場 北千住シアター1010

代表者 堀越壽嵩

昨年はコロナ禍で開催出来ず、二年振りの開催となりました。表彰

式は残念ながら見送りましたが、やはり実物の作品群は迫力があり開催の喜びもひとしおでした。毎年の課題は昨年順送りの「鶴」「亀」で縁起良く楽しいものとなりました。



令和3年度太玄会所属団体の活動予定

団体名	代表者	活動内容	開催日時	会場
書星会	宮負 丁香	第69回書星展	11月10日(水)～11月16日(火)	東京都美術館
書王社	鈴木 暎華	書王社選抜展 書王社条幅研究会	7月14日(水)～7月18日(日) 10月2日(土)	アートガーデンかわさき 神奈川県立武道館
研友社	田中 鳳柳	第34回研友社展 その他 錬成会	9月29日(水)～10月4日(火)	鷺毛堂錬成会場
真仙会	小出 聖州	教養書道講座	秋頃予定	ホテル信濃路
鳥跡会	弘田 長風	第28回歌の会書作展	4月1日(金)～3日(日)	徳島県立文学書道館
	南 溪石	第19回一心会書展	10月15日(金)～10月17日(日)	阿波銀プラザ
九龍社	垣内 楊石	第61回九龍社書展	11月12日(金)～11月14日(日)	福井県立美術館
		九龍社研修会	5月16日(日)～11月21日(日)	ふれあいみんなの館・さばえ
書研社	植木 蒼穹	第44回書研社展	9月21日(火)～9月26日(日)	銀座 大黒屋ギャラリー
高友社	落野 雅宣	第43回高友社書展	4月15日(金)～4月19日(火)	上野の森美術館
青龍会	下谷 蕪雪	第52回青龍書展 学生書展併催	4月9日(土)～4月11日(月)	すみだリバーサイドギャラリー
燎原社	堀越 壽崑	第56回燎原社書展	9月11日(土)～9月12日(日)	シアター1010ギャラリー 北千住丸井11階

令和4年度太玄会所属団体の活動予定

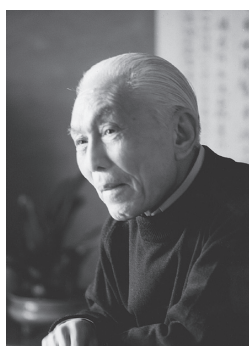
団体名	代表者	活動内容	開催日時	会場
書星会	宮負丁香	第70回記念書星展	11月10日(木)～11月16日(水)	東京都美術館
研友社	田中鳳柳	第35回記念研友社展 鍊成会	10月6日(木)～10月9日(日) 7月	銀座かねまつホール 鷺毛堂鍊成会場
真仙会	小出聖州	第55回記念真仙会書展	5月13日(金)～17日(火)	ながの東急百貨店
鳥跡会	弘田長風	第30回歌の会書作展	未定	未定
	南溪石	第20回一心会書展	未定	未定
	中尾勝子	第43回書研社展	3月24日(金)～3月26日(日)	徳島市アミコ・シビックセンター
	々	鳥跡会合同鍊成会	9月4日(日)	春日会館
九龍社	垣内楊石	第62回九龍社書展	2月3日(金)～2月5日(日)	福井県立美術館
		九龍社研修会	5月22日(日)～12月11日(日)	ふれあいみんなの館・さばえ
書研社	植木蒼穹	第45回書研社展	9月20日(火)～9月25日(日)	銀座 大黒屋ギャラリー
高友社	路野雅宣	第44回高友社書展 学生書展併催	4月15日(土)～4月19日(水)	上野の森美術館
燎原社	堀越壽崑	第57回燎原社書展	9月24日(土)～9月25日(日)	シアター11010ギャラリー 北千住丸井11階

田中鳳柳先生 追悼特集

令和三年（二〇二二）十一月三日、田中鳳柳先生が安らかにご逝去されました。心よりお悔やみ申し上げますとともに、ご冥福をお祈りいたします。

合掌

田中鳳柳（一九三二—二〇二二）



昭和七年（一九三二）生まれ
産経国際書会最高顧問
第23回産経国際書展
「内閣総理大臣賞」受賞
全日本書道連盟顧問
太玄会常任顧問
研友社主宰

田中鳳柳先生と太玄会

昭和三十五年（一九六〇）の第一回展から六十三年間連続出品
・庶務部……昭和四十六年（一九七二）～昭和四十九年（一九七四）
・広報部……昭和五十年（一九七五）～昭和五十一年（一九七六）
・副事務局長……昭和五十二年（一九七七）～昭和五十三年（一九七八）
・事務局長……昭和五十四年（一九七九）～昭和五十七年（一九八二）
・副理事長……昭和五十八年（一九八三）～昭和六十一年（一九八六）
・理事長……昭和六十二年（一九八六）～平成四年（一九九二）
・副会長……平成五年（一九九三）～平成十六年（二〇〇四）
・会長……平成十七年（二〇〇五）～平成二十五年（二〇一三）
・常任顧問……平成二十六年（二〇一四）～令和三年（二〇二二）

鳳柳先生を想う

金丸 鬼山

田中鳳柳先生に出会いご指導を受けた事で私の書道人生は大きく変わりました。今現在こうして在るのも、先生の厳しい御教授と導きのお陰であると深く感謝しています。

思い起こせば二十九歳の折、勤務先の書道部に入部したのが書を始める切っ掛けでした。菅菰会から講師を招いての楽しい書活動でした。が、この頃の書道界は離合集散が盛んな時期で、講師の先生も他会への移籍やら会の設立等で慌ただしく、弟子は翻弄され、私は安住の地を求めました。そんな折、講師の先生から



田中鳳柳先生と行く研友社研修旅行 天柱山入口（2007年6月1日）

の紹介で田中鳳柳先生率いる研友社を知り、入門する決意をしたのである。

最初の稽古で「何でも良いから色紙を二枚書いてくるように」と宿題を出されました。今では何を書いたか全く記憶に無いのですが、当時何の為なのかもわからないまま書いた色紙を持って先生宅に伺いました。その頃の先生は、眼光鋭く人を寄せ付けないオーラが有り、大変緊張したことを今でも覚えています。先生は私の色紙については何も語らず「君は、法帖は何を勉強しているんだい？」と尋ねられ、私は咄嗟に答えることが出来ませんでした。先生は即座に、王羲之、王献之は無論の事、魏・晋以前の書に目を向けるよう仰せられたので、私は初心に帰り先ずは鍾繇の法帖臨書に没頭しました。研友社に入会したこの年、移籍前の会ですでに師範でしたが、改めて師範試験に挑戦するよう先生から言われました。いくつかの課題の中で、半切楷書作品を鍾繇仿意で仕上げて提出したところ先生の目に留まり褒められた事を今でも覚えています。

先生は、作品に対しては常に厳しく妥協を許しませんでした。師範試験に何度も挑戦するも合格できず、諦めてしまった会員が何人いたことでしょうか。そんな手習いの厳しさの反面、日頃の稽古に於いて自らの貴重なコレクションを惜しげも無く見せて下さいました。また、古典に対する飽くなき探究心を持たれた先生は【鄭道昭摩崖と漢碑の旅】【台北故宮晋唐法書特別展ツアー】等々の企画を自ら立案され、会員と共に古典とのふれ合い旅を楽しむこともありました。この様にして、目習いと古典を勉強する大切さを、常に身を以って指導くださったのです。

昨年七月病に倒れ、癒える事無く黄泉の国へと旅立たれた田中鳳柳先生。菅菰会・書芸新潮社を経て、一九七三年一二月研友社を創立以来四八年間、会長・主幹として研友社並びに会員の為にご尽力くださいました。

私達は先生の指導理念を忘れる事無く、真摯に書を学び、良い作品作りの為努力を惜しまない事で、先生に感謝の気持ちを伝え続けたいと思います。お疲れ様でした。そして、ありがとうございました。

合掌



研友社研修旅行 佐久美術館（2013年11月8日）



浅見錦龍書作展 於書星会館（2012年3月29日）

田中先生を偲んで

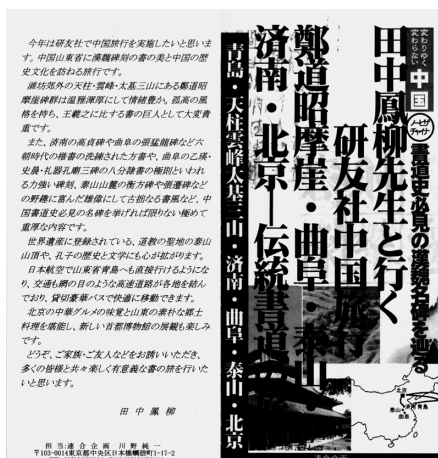
小林 紫雲

田中先生に初めてお会いしたのは六十数年前。先生三十歳になったばかりで、当時は水道局に勤務されていて、日曜日に教室を開いていたと思います。私は受験や子育ての為数年間お休みをしましたが、再び先生を訪ねると、「教える事はとても勉強になる。自分の教室を持ちなさい！」と言われました。

翌週一階の居間に呼ばれ、あの慈愛に満ちた目差しで、『書道教室』と隷書で書かれた大きな看板を手渡されました。感激のあまり何も言えず、深々と頭を下げていた事を今でも思い出します。

平成四年から研友誌の編集を担当する事になりましたが、色々困難にぶつかり、「私には出来ません！」と涙ながらに申し上げました。「おれが全面的にバックアップするから大丈夫だ」と即座に却下。以後研友誌も令和四年七月で五八三号を数えます。

先生とは色々お話しもしました。今でも心に残っている赤羽雲庭先生とのエピソード。研友社の仲間と行った、中国八日



間、桂林の旅は先生とご一緒出来た最後の旅行になりました。

尊敬する師でもあり、父の様な存在でもあった田中先生は、私を導き、進むべき道を開いて下さいました。

先生！もう少し頑張ってまいります。残して下さった「研友」を皆でしっかり守って行きたいと思っています。

田中鳳柳先生の思い出

伊藤 柳絮

先生、今頃先に旅立たれた先生方と大好きなお酒を飲みながらあれこれと楽しく書論を交わしておられる事でしょう。今でも先生のお宅近くを通る度に「おう！」とひょっこり顔を出される様な気がします。

先生には何十年という長い間お世話になりました。先生と私が親子程年が離れているせいでしょうか、先生と個人的に交わした会話は少なかつたように思います。先生の基本はあくまで「古典」。指導方法もある程度方向性を示された後は自分の頭で考え精進しろというものでした。作品を見る眼も厳しいものがありました。展覧会に出す作品を見て頂く



雲峰山山頂にて（2007年6月2日）

時はなおさらだったような気がします。それでもごくごくたまに「これで（この書き方で）良いんだ」「上手くなったな」という言葉をもらえる時がありました。表情には出しませんでした。心の中ではガッツポーズを作りうれしさをかみしめたものです。先生と机をはさんで向かい合って座り、作品を出す時の緊張感がなくなる事は何年経ってもありませんでした。

先生が旅立たれた今、その厳しさの中にもじっと見守り続けて下さっていた温かさを改めて感じています。きつと「なんだ、お前は今頃になって気がついたのか」と苦笑いされているに違いありません。体調の悪い中でも稽古をして下さり、本当に最後の最後まで書家として見事に生き抜かれた先生。今、一番思い出すのは懇親会の時などに見せて下さったとてもリラックスした素適な笑顔です。

先生、長い長い間ご指導頂き本当にありがとうございました。

田中鳳柳先生を偲んで

小宮 柳 岱

田中先生との出会いは今から三十七年前の秋だったと思います。書道会における予備知識もなく、「私が好きな書を書かれる先生」と姉に連れられて伺った先が田中鳳柳先生のお宅でした。稽古日だったその日、教室では大きな作品の添削の最中でした。それは太玄展作品の指導中だったのですが、その張りつめた雰囲気の中、私は只緊張しているばかり

でした。やがて一段落し、先生の表情も和らぎ只ひと言「通えるかい？」入会の瞬間でした。

週一回の稽古日何種類もの課題を一枚宛丁寧に添削して頂くだけで一杯でした。回を重ね教室の雰囲気慣れしてくると、時々掛け替えられる床の間の軸などにも眼が向けられるように。「近くで見ても良いよ」と先生。時には書画の解説も。時たま業者が持参する中国の名品や、先生宅での趣味の会「面白倶楽部」集會にもお手伝いを兼ねて呼んで頂き、名品鑑賞の機会を与えて下さった事もありました。本当にどれだけ勉強させて頂いたか。

書に限らず芸術全般にも憧憬が深く、或る時は二胡の演奏会にも数人とお供させて頂いたこともありました。又、研友社の研修旅行で萩を訪れた時の事。萩焼きの店があると街並を説明しているガイドさんを見れば、先生を筆頭にてんでに自由行動をした思い出も。

常に審美を追究され、妥協を許さなかった厳しい先生でしたが、何かの折にふとした優しさ、温かさを感じさせる大きな懷で包んで下さっていたんだと感謝するのみです。

今、テレビでは大相撲の中継が。先生好きでしたね、としみじみと思ひ返しています。

コロナ禍の中で療養されていらした先生には、お逢いすることもできずお別れしたこと、本当に淋しく悔しかったです。

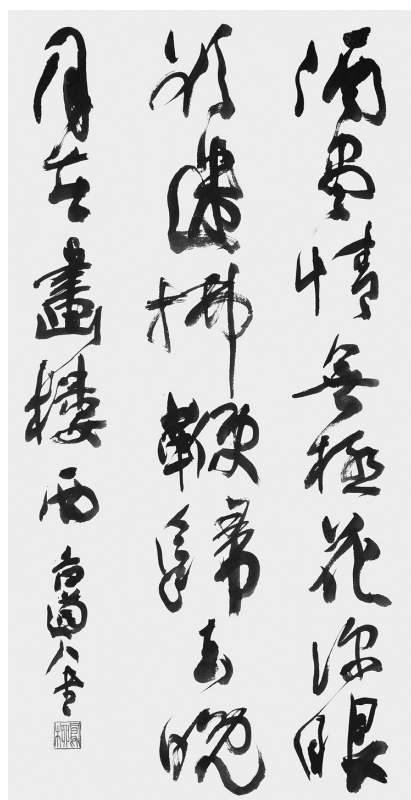
田中先生、永い間本当にありがとうございました。今は只お疲れ様でした、ごゆっくりお休みくださいとのみ。

合掌

第19回産経国際書展（2002年）



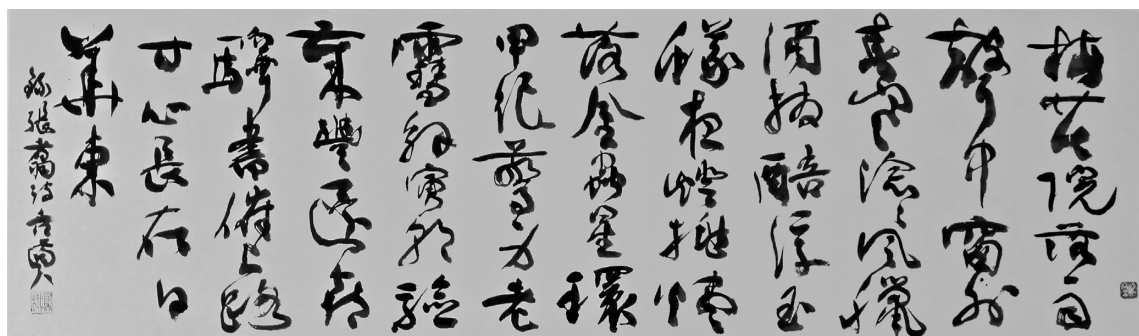
第22回産経国際書展（2005年）



第23回産経国際書展 内閣総理大臣賞（2006年）



第50回太玄会書展（2009年）



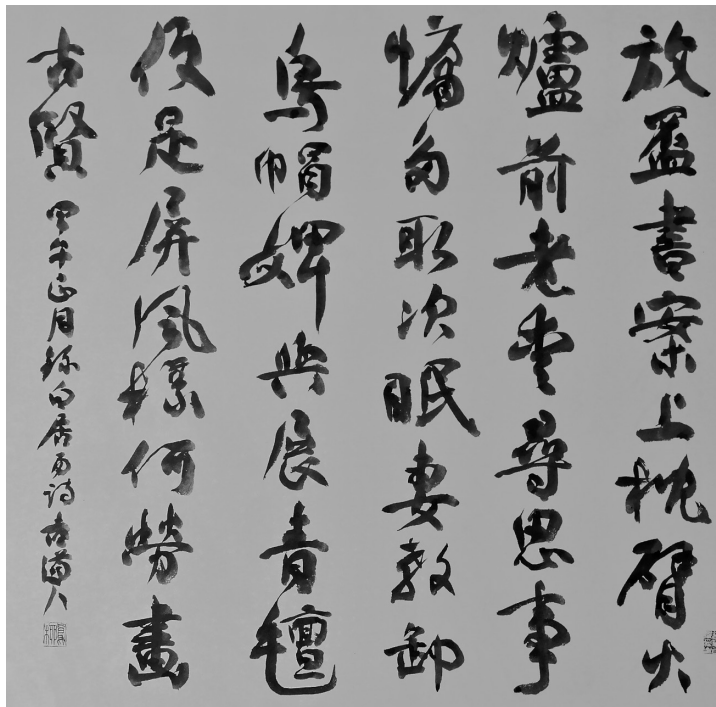
第23回研友社展（2010年）



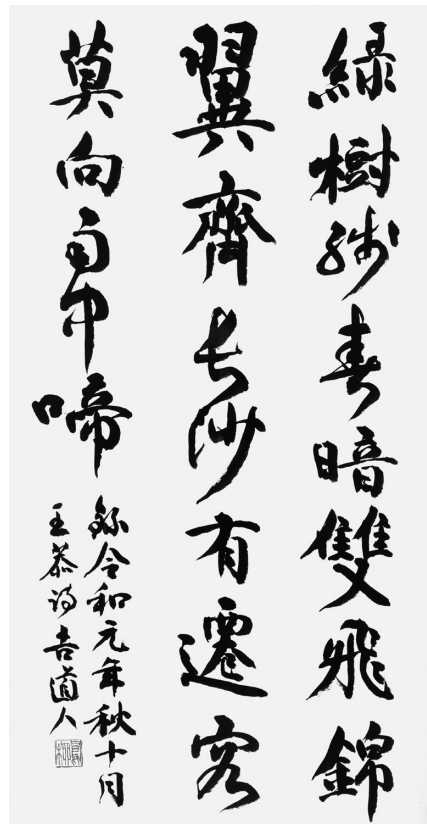
八秩の書展（2012年）



第55回太玄会書展（2014年）



第63回太玄会書展（2022年）



八秩の書展（2012年）





第59回太玄会書展授賞式・祝賀会（2018年1月21日）



第50回記念太玄会授賞式・祝賀会（左から4番目）
（2009年1月11日）



総会風景（2014年4月20日）



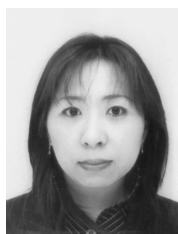
太玄会役員展（2014年5月6日）



会員賞選考風景（2017年1月14日）

特集

恩師への思い



第六十二回太玄会書展 太玄大賞受賞

書人社 浅 香 麗 芳

書道を続けて四十年になります。振り返りますとピアノやソロバン等のお稽古に何をやっても長続きしなかった私に、母が素適な先生を見つけたと言って連れて行かれたのが現在お世話になっている西村東軒先生の奥様でした。自分が幼かった故もありますが、先生の御指導が楽しく、毎月の教本に一級づつ上がっていくのが嬉しく楽しかった印象しか残っていません。中学一年になって初めて黄山谷の范滂傳の一節を大人の方達の仲間入りをし、二列の行書を書きました。先生からは柔らかな線を出す様に言われましたが、その当時は先生のお手本を真似て書く事が精一杯で細く書いたら弱々しくなり、柔らかな線とこのを理解するのに苦戦した事を思い出します。高校で六朝楷書を学ぶ様になり、龍門二十品の中の「楊大眼造像記」の一節や「司馬頡妻孟敬訓墓誌銘」の一節等展覧会に出品する様になりました。形も独特で右につきあげる様なきれ味鋭い線は難しくナカナカ特徴を捉える

事が出来ず、いつも先生を困らせていた様に思います。就職して書道から一時遠ざかっていましたが、四、五年経つてもう一度書をやりたいと思う様になり再び、西村東軒先生にご指導をお願いしました。太玄では平成九年に「傳山漢古詩」の横書きの作品で初めて準特選を受賞し、その後木簡、金文、楚簡を勉強してまいりました。先生からは、書は絵と同じでセンスが大切だと言われてきました。白い紙の上に、白と黒のコントラストをどの様に表現するか？書の大と小をどの様にバランス良く書きあげるか？遠くから見ると一字一字の間隔、中心の線芯を通す事、それは定規で計っても、コンパスで計っても計れない。自分の眼で見えてきた事、腕を動かしてきた事、坦々と四十年続けてきましたが、いつの間にか培われて、自分よりも眼と腕が書を識っているという事を知りました。一つの事を続けてきた事の成果だと思っております。

そして今春、太玄大賞を受賞する事が出来ました。長い道ゆえでしたが書道続けてきて本当に良かったと思えた瞬間でした。続けていたからこそその受賞です。その間、何度か大病を患い、挫けそうな時度々でしたが、先生は叱咤を押さええ激励のみで優しく見守って下さいました。西村東軒先生、奥様、本当にありがとうございます。感謝の気持ちで一杯です。社中の皆様には病気の事を氣遣って頂き、暖かい雰囲気の中で四十年間、お稽古出来ました事、幸せに思います。書く事、書ける事の喜びを噛み締め、これからも精進してまいります。

書道といけ花



第六十二回太玄会書展 太玄大賞受賞

青龍社 柏原桂雪

いけ花は二十代から、書道は三十過ぎから勉強している。

書道といけ花、この二つには共通すると思われる点がある。

文字は線によつて構成されている。書は線の組み合わせの表現である。限られた紙面に文字を組ませたり、長く線を引いて空間を取り入れる。いけ花は植物の枝を線と見て、線のうつくしさを組み合わせ表現する。いける限られた場所に植物の枝で塊を作ったり、大きく枝を伸ばして広い空間を作品に取り入れる。どちらも一本一本の線が重要である。

私達は、書の長い歴史の中から、多くの書家の作品を臨書し、やがて自分らしい書を作り出していく。同じ文字でも書き手によって個性が出て異なる作品になる。いけ花も同じ材料でいけても十人十色の作品が出来る。書もいけ花も人の心を表現する事である。

毎年、青龍書展にいけ花を数点いけている。展示された書の作品に風という文字があると植物の葉をなびかせるようにいけて風を表現したり、学生部の会場には、大きく伸びやかに成長して欲しいと上に伸ばした作品を制作し、私の気持ちを込めていけている。

いけ花を早くから勉強しているので、書を書く時も、いけ花に置き換えて理解する事もある。

現在、いけ花の作品には、自分の想いを表現出来るが、書の作品はなかなか思うように表現出来ない。書の奥深さと自分の未熟さを常々痛感させられる。

王鐸と米芾に魅せられて



第六十二回太玄会書展 太玄大賞受賞

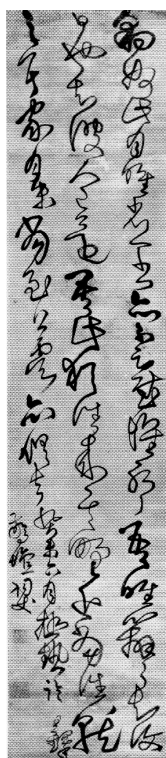
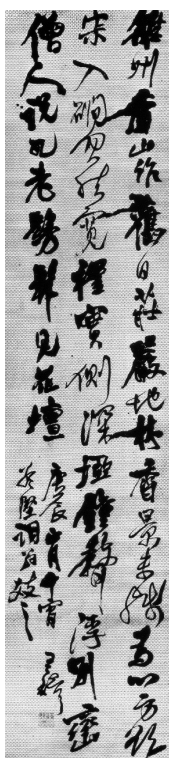
書星会 時田大祥

好きな古典と問われると、たくさんありすぎてなかなか絞れないが、好きな能書と問われれば、迷いなく「王鐸と米芾」と答える。彼らは私の中の二大巨頭であり、自分の根底に据えたいと常に願い、勉強している能書である。

王鐸との出会いは、大学時代であった。高校時代の恩師であり、師匠の宮負丁香先生が、雑誌『墨』の特集「王鐸の書法を学ぶ」で解説されているのを読んだ時である。高校時代、先生にお手本を書いていただき、王鐸調の行草作品を書いたことがあったが、当時はまだ、その書風のルーツがどこにあるのかなど知らず、ただ見様見真似で書い

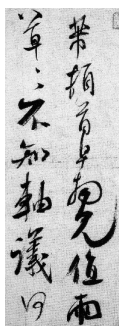
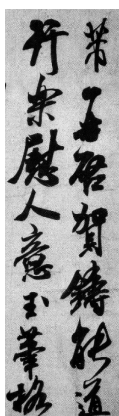
ていたものだ。

大学のある研究室の本棚には、雑誌『墨』が閲覧できるようになっていた。その中から、前述の「王鐸の書法を学ぶ」や、臨時増刊「書の技法指南」でも宮負先生が、王鐸の布置章法について解説されているのを見つけ、これが先生の書のルーツだったのだと気づき、そこからのめりこんでいった。その後、村上三島先生の『王鐸の書法【條幅篇】（二玄社）」を手に入れ、ますます王鐸の虜になっていった。大学の卒論のテーマは「王鐸の書風の変遷について」。今思えば論文とは言えない拙いもので、ほとんどこの本から引用させていただいたものだった。しかし、これは今でも私の座右の書となっており、暇があれば手に取って鑑賞し、眼福を得ている。



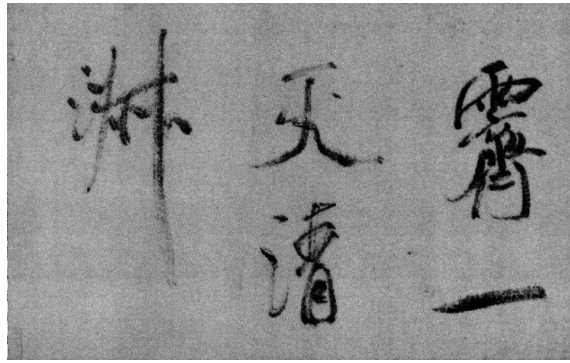
王鐸の長条幅の中でも、特に気に入っているのが、臨書では「臨王献之・王羲之帖」、自運では「雒州香山作」である。前者は王鐸の真骨頂とも言える連綿草で、行にうねりを加えながらどこまでも続く連綿には、感嘆するばかりで臨書する気も起こらないほどである。これ

は、『淳化閣帖』の中の王献之「豹奴帖」、王羲之「吾唯弁々帖」「月末帖」という何の関連もない三帖の好きな部分だけを抜粋して臨書したものである。王鐸の臨書作品は、しばしばこのように、字が抜けていたり関係のない文をつなげていたり、文意が通らないことがある。また、字形の上では原帖とは似ても似つかないが、まぎれもなく二王の意を汲んでいる。いわゆる「意臨」とも異なる王鐸のこの臨書態度は、私のような凡人には到底真似のできないことであり、専ら鑑賞の対象となっている。それに対して、後者は何度も臨書した作品の一つである。王鐸は、自作の詩を創作する時は、なぜか行書主体で書くことが多い。豪快に墨が流れているのが特徴の一つであるこの作からは、溢れるほど墨を多く入れることを学んだ。また、前者ほど連綿も長くなく、字の格好もよいため、好んで臨書した。文字の大小や行間の響き合いなど、王鐸の布置章法を学ぶには恰好の作品である。この他にも好きな長条幅作品はたくさんあるが、臨書の対象はほとんど後者のような自運の作品である。その中でも程よい連綿のあるものを選んでいく。



次に、王鐸を勉強するために、そのルーツを辿る中で米芾との出会いがあった。もちろん、本を正せば王羲之に行き着くし、顔真卿も欠かせない。しかし、米芾の存在は決して無視できない。『王鐸の書法【條幅篇】』の解説の中に、「肩のこらない米芾」という評があり、とても印象に残っている。米芾は、王鐸を学ぶ上で、また王羲之の書法を

知る上でも欠かせない存在である。米芾といえば、代表作は「蜀素帖」であるが、私はそれよりも、「賀鑄帖」や「値雨帖」などの尺牘を好んで臨書している。前者は謹厳であらたまった印象があるが、後二者は自然で自由闊達、米芾らしさが存分に発揮されているところに魅力を感じる。「賀鑄帖」からは重厚さを、「値雨帖」からは爽快な筆勢を学ぶことができる。王羲之の真跡が存在しない今日、「二王の再来」と称された米芾の書を学ぶことは、王羲之書法を学ぶことと言っても過言ではないし、王鐸書法にも通ずるため、避けて通れない。



その他、米芾の書で私が好きなのは、「虹縣詩卷」である。これは米芾最晩年の自由な境地で、まさに天衣無縫。この中の「淑」字の格好のよさには惚れ惚れと見とれてしまう。これも前述の王鐸連綿

草同様、なかなか手が出せず、私にとっては鑑賞の対象にとどまっている。

以上、私の二大巨頭「王鐸と米芾」について述べてきたが、まだまだ勉強不足で、到底その神髄に迫ることはできない。しかし、牛歩でも一歩ずつ、学書に励んでいきたい。

私の書の背骨となった

古典への思い



第六十二回太玄会書展 太玄大賞受賞

鳥跡会 吉村清志

私にとって古典とは「格好いい」「こんな字が書きたい」そして、たくさん練習した後に「それらしく書けた（あくまでもその時点では：です）」という達成感。自分にはない筆遣いや文字の結構の発見等、自己満足ではありますが、色々な楽しさを感じさせてくれ、私の書の幅を広げてくれるものです。

「私の書の背骨となった古典への思い」というテーマで、私と書を振り返ると高校生、大学生の時に学んだ漢字や仮名の古典の数々を思い出します。篆書、隸書、楷書、行書、草書の基本となる古典や仮名の古典等多くの古典をたくさん先生の先生から学びました。そして、大学入学時に書道塾をやめていた私は、今まで先生から教わったことを基に自分で試行錯誤を繰り返して、作品を創作するようになりました。今でも臨書を続けている古典は「九成宮醴泉銘」「集字聖教序」「書譜」「真草千字文【智永】」「張猛龍碑」「趙之謙」です。

今回「最も親しみ愛した古典」ということでしたので、その中で「趙之謙」について書かせていただきます。

「趙之謙」との出会いは、古書店で見つけた「条幅範例集」という本でした。そこで「趙之謙」の倣書作品として掲載されていた作品を見て、自分もこのような作品が書きたいと思い、「趙之謙」の臨書や書籍の購入をしていきました。大学生の所持金は多くないため、購入できたものも限られていましたが、古書店やインターネットを巡り、趙之謙の書籍を探し手当たり次第に購入していきました。その時に購入した「趙之謙行書冊【松丸東魚編、白紅社発行】と「趙之謙行書帖【清雅堂発行】」は半紙で臨書するにはちょうど良く繰り返し臨書しました。当時、「趙之謙」の作品の楷・行・草書の字形は線が柔らかく羊毛の筆を使ったものと考えていたことや、羊毛の筆が使えるようになったかったこともあり、常に羊毛の筆を使っていました。

臨書をする中で、どのように臨書するとよいのか、どのような筆遣いをするのかなどを知りたくて、たくさん書籍を調べました。「趙之謙」が「包世臣」の「藝舟雙楫」の影響を受けたと知って「藝舟雙楫」を探し、その中から、黄小仲の言葉として「唐以前の書はすべて良から始まり乾で終わっている」という内容を読み、自分もしてみようと挑戦しました。「逆入平出」で書くこと知れば書き方を調べ、その練習をしました。また、面白そうな本があれば購入し、読みふけていました。

古典の見方について、文字の特徴として字の形の特徴の他、線がどのようにして引かれているかを考えていましたし、書籍などでもそれらを調べました。起筆、送筆、終筆において筆先のどの部分をどのように使うか筆を動かしながらつかんでいきました。毛先の動き方を観

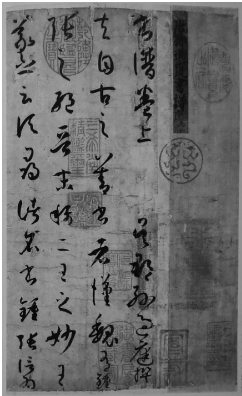
察し、古典と同じような線になるように、何度も試しました。筆の持ち方についてもいろいろな書籍からどの持ち方が良いのか試しながら確かめたのもこの時期でした。また、「趙之謙」の臨書を進める中で、筆の動かし方だけでなく、鄧石如の言う「字画がまばらなところでは、馬をも走らせることができるくらい広くあけ、密なところでは風をも通さないくらいにつめて書き、常に白を計って黒をおく（『芸舟双楫』）」粗密に関することを意識して書くことで、余白を見ることを学びました。それからは、線の引き方だけでなく、余白を考えながら、臨書をしました。

また、大学の先生から筆を持って書くだけでなく、古典や作品を見る目が大切だと教わりました。線、余白、墨つぎ、文字の大きさ、作品の構成、墨色、紙等、視点をどんどん増やして見るようにしました。いろいろな展覧会や美術館に行き、多くの書作品や古典を見ながら多くの視点を学び、視点を増やすことで、自分の作品に生かす。何が良いか、なぜ良いのか、違いが分かり、「見る」ことができるから「書く」ことにつながることを感じてきました。

今回私の書について振り返るため、本棚を眺めると「書道講座【西川寧】」や「臨書新研究【上田桑鳩】」「墨」「趙之謙―復刻 悲盦贗」「趙之謙書畫編年圖目」「書の文化史」：等数百冊、懐かしい本に呼ばれ、ついつい時間の経つのを忘れてしまいました。本を探してくると言って書庫へ行ったきり戻ってこなかったもので、嫁に本当に本を探していたのかを疑われました…。あまりに遅いので字を書いているのかと思ったそうです。そして、私と書道について振り返る中で「趙之謙」

がいかに私の中で大きな存在だったかを再確認することができました。

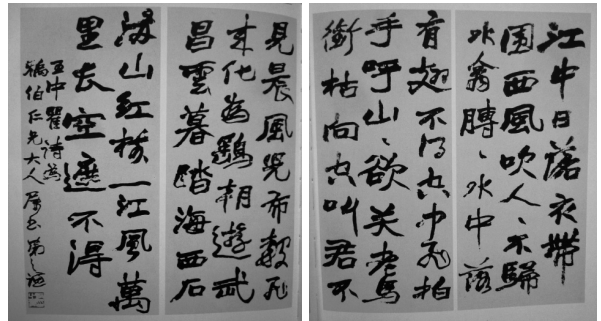
まだまだ、勉強中で見えていない部分やできていない技術が多く、未熟な限りです。更に広く深く精進し、これからも励みたいと思っています。我が家は、仕事と家事と3人の子どもの育児を共働きの妻と二人で「全ての家事、育児をできる時間がある人がする」というシステムでしています。平日は仕事と家事と育児に追われ、筆を持つ時間が取れない日も多いです。力量も無いが時間も無い、そんなことを嘆きつつそれだからこそ、書けることに喜びを感じ、これからも臨書や作品作りを通して、楽しみながら書を書いていければと思います。



孫過庭 書譜



張猛龍碑



【趙之謙書畫編年圖目】行書王中瞿詩四屏

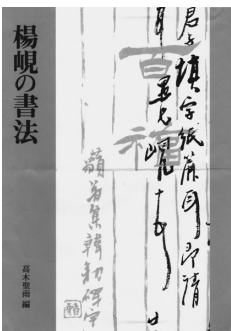
古典と自分の書



第六十三回太玄会書展 太玄大賞受賞

書星会 尾崎 清爽

小学三年生、初めての毛筆の授業で筆の持ち方から、先生は毎時間とても丁寧に教えて下さったことを今でも覚えています。授業で書くだけでは書き足りず、週末は自宅に習字セットを持ち帰り練習したものです。そのうちに、どこが悪いのかわからないけれど上手いかないところが出てきて、塾に通い始めました。書塾の先生は墨をたつぷりと含ませてゆったりと筆を進めていくのに、滲みすぎるのがなく、九歳の私にはまるで手品か魔法を見ているような気持ちになったものでした。楽しい緊張感に包まれて通った書塾でしたが、高校受験の為に学習塾に通い始める頃、あっけなくお習字は退会させられてしまいました。勉強していてもお習字教室のことは心の中に残って、忘れてしまうことはできませんでした。



私の人生にとって大事だったと思いますのは、高校の芸術の授業で書道を選択し、現在の師である宮負先生と出会って臨書を教えて頂いたこと、部活動で楊硯の隷書を学んだこ

とです。当時楊硯の波礫が難しくて、先生から何度も「違う」と言われながら二ヶ月程四苦八苦しました。「書き初め」という展覧会を通して、締め切りまでの期間に作品を仕上げることを学び、作品を見て下さった方が「この作品は楊硯を勉強しているね」とわかって頂ける様にと願って書いていました。夢の中でも字を書いていた。自分の心身の全てを書くことに捧げている感覚は書道以外では得られなかった幸せだと思っています。

様々な展覧会に挑戦する日々の中で、ともすれば展覧会を消化するように過ごすこともあり、また、不勉強に泣いて書くのが辛い時もあり、ややもすれば「自分はこうして字をかくているんだろう」と思い悩むことがあります。北京冬季オリンピックでフィギュアスケーターの羽生選手が人類初の四回転アクセルジャンプに挑戦した心境を聞かれて、「九歳の自分と一緒に跳びました」と明かすのを聞いて、波礫一つに二ヶ月も四苦八苦していた高校生の自分を重ねました。筆を持つということは今や食事や睡眠を摂ることと同じように私の生活の一部、欠くことのできないものになっています。

書の道を通き、
方向を照らしてく
ださいました師匠
に心から感謝を申
し上げますとともに、
私の元に通う
子供達に筆を持つ



隸書仙傳拾遺語四屏のうちの二屏（七十二歳作）

幸せを少しでも拡げ伝えていかれるように、今後とも精進してまいりたいと思います。

「三つの禁」に励まされ



第六十三回太玄会書展 太玄大賞受賞

真仙会 小林桂葉

私は真仙会に所属し、真仙会の中の書友会という社中に席を置いています。四年前に師であった上嶋桂風先生の急逝で悲しみと不安でいっぱいだった数ヶ月後、真仙会会長の小出聖州先生に指導いただけたことになり書道が続けられました。しかし新たな師と上嶋先生の書風が異なり、小出先生の丁寧なご指導にもとまどうことが多く、続けられるのか不安な時期がありました。

小出先生は長野市にお住まいで、月一回佐久の地まで来て私たちに指導下さっているのですが、ある日の研修会で「三つの禁」の話をされました。

その一、節約の禁 そのころ私たちは表具屋さんから墨が汚くて表装が大変と言われていました。先生に墨についてお聞きすると、「墨は一回ごとに新しくすべきです。もったいないからと何日も同じ墨を

恩師への思い



第六十三回太玄会書展 太玄大賞受賞

九龍社 三好 凌 香

使うのはよくありません。一般的に節約は美德と言われますが書の世界では節約はだめですよ」と教えて下さいました。その後も墨の色が気になる時は、新しい墨を使ったか、量はどうかなど聞き出されて繰り返し節約はだめですよと諭されました。

その二、真面目の禁 お手本に近づけて字を整えることに拘り墨ののらない作品を書いていた時、先生は手本の字だから絶対この形で書かなければというのはナンセンス、自分がおかしいなあと思っただけなら臨機応変に対処してよいと例を示して下さいました。手本は絶対と思っていた私には目からウロコの瞬間でした。

その三、謙虚の禁 「謙虚」と言う言葉は褒め言葉で、謙虚な人と言われるのは嬉しいことだと思っていますが、先生は「謙虚な人とは悪く言えばとにかく目立たないようにしようと言うことで、自分の殻に閉じ籠もることになりますからだめです」と話されました。人は人、我は我なのです。閉じ籠もらず多くの人に聞き話しをして学びなさいと励まして下さいました。

最初の師を亡くし、不安と迷いの中にいた私は、小出先生の「三つの禁」の話に書友会の仲間と共に聴き笑い合いながら心が開かれたと思いました。その後も書道が続け新しい自分に出会いたいと願っています。これからも仲間と共に自分の社中以外の方とも勇気を出して色々な話をし、学び続けていこうと思っておりますので今後ともよろしくお願い申し上げます。

私は当時のことはよく覚えていませんが、幼稚園の頃から兄に連れられて習字を習ったのでした。小学生、中学生、高校生時代も習っていたので県内外の書道展には多く入賞することができました。しかし、就職とかいろいろなことであまり行かなくなりましたが、ある日のこと全高文連の書道展で、他の人のすばらしい臨書作品を見て感動し、自分が書道家となる意欲に呼び起こされたのです。

古典の臨書作品だからすばらしく思ったのでしょう。私は古典を臨書することの大切さをどことなく感じたのです。それから私は更めて師に古典を中心とした書を学ぶことにしました。

師垣内楊石先生は、赤羽雲庭先生の教えを受け王羲之の書法を学んでおられて、私も王羲之系の正統派の楷書、行書、草書などを少しずつ学んできました。

師は常に「先人の書に優るものはいまだかつて出ていないし、これに優る手本もないし師もない。文字は正しく丁寧に美しく。そしてその美を追究する書において文字を大切にすることは、言うまでもなく王羲之らの正統派の古典のもつ美を学ぶ必要がある」と、力説され

ます。

師の教えを戴き臨書に励み、臨書によって得たものを自分の作品に取り入れたいと私なりに色々試行錯誤を重ねますが、どうしてもまとまらず、結局はお手本をお願いすることになります。ご指導の中で「たとえ」を随所に話され、適切に解り易く教えていただいております。お手本を前に「ウーン！何かが違う」。その格調高い優雅な書風の中に古典に裏打ちされた師の書は、実に楽しげに書いておられ感動を受けます。そして、その時の雰囲気や感動を忘れないうちに練習し、表現することにした。私には頭で覚えることも必要なのではないかと思います。

師の業績は偉大で、私達を仰天させるものばかりです。身近なそのひとつとして、二十数年前に発刊された研究誌は私達の心の中にスーッと入ってきます。臨書作品のお手本、もう似ないところはないうまでの心技一体の書法を体得されていて、正しく美しく品性のある書法のすばらしさに魅了されています。

いつも寄り添い暖かく導いてくださる師と、応援してくれる家族への感謝を忘れず、書友を大切にして心にゆとりを感じながら心豊かに歩んでいきたいと思っています。

師匠へ感謝をこめて



第六十三回太玄会書展 太玄大賞受賞

菅菰会 山口 杏園

今回の受賞は私にとって、これまでの日々を改めて振り返る貴重な機会となりました。長きにわたり御指導頂いております師匠、菅菰会会長石川流芳先生をはじめ菅菰会の諸先生方、教室の皆さまに恵まれたことをつくづく有り難く嬉しく思います。会社勤めしながらの教室通いも振り返ると二〇年を超え、師匠のもとで学べたことは大変幸せなことだと感じ入っております。

私事になりますが、書道教室で師匠に半紙を見て頂いた時、「悲しみに負けてはいけない」と言葉をかけて頂いたことがあります。それは父が突然逝去した時でした。この師匠のひと言にどんなに勇気づけられたことでしょうか。改めて有り難く思い出します。慰めの言葉としてではなく、「書を通じて乗り越えなさい」という真摯で厳格な書に対する心構えを示して下さったものだと思ふと後で痛感したものです。書の道は人生における修行にあい通じるものである——そんなことを師匠のお姿から感じ取ることができます。

王羲之の臨書を常々研究していらつしやる師匠が、以前、菅菰会誌の巻頭言にて、〈臨書について〉川谷尚亭先生の「尚亭先生書話集」手島右卿より抜粋してご紹介くださったことがあります。それをここ

に転記させて頂きます。

「臨書は、一點一畫の形と筆意をよく観察してその趣を出すべきであるが、如何なる人でも原書の通りに出来るものではない。要はその形の取り方と筆意の要領をつかまえて、行くといふことである。それのみではない。全體を一貫している筆力、気分、餘韻というものを考えて、作品全體の上の綜合美というものを研究して行かねばならぬ。點畫に拘はれて大局を忘れるものは、遂に眞の妙趣を解することは出来ぬ。書妙味といふものは墨ある處よりも空白の處にあることもある。一部分の爲に全體を貫いて行く力を失つてはならぬ」

この含蓄ある言葉を噛み締めながらも翻弄される日々ですが、師匠の大きな背中を追いながら自分なりに臨書の勉強を続けていきたいと思っております。

改めて今、師匠に出会い、師匠のもとで勉強させていただけることを心より有り難く幸せに感じております。もっと勉強して腕を上げて師匠に喜んで頂きたいとも念じておりますが、感謝しつつもなかなか上達いたしません。それでも書が続け、書を学んでいくことでいつかは些少でも恩返ししたいという思いは強くなる一方です。教室の皆さまの思いも同じだと拝察いたします。そしてまた、師匠の書への無窮なる志を大切に紡いでいくことができましたら幸いです。

まだまだ道半ばの私ですが、これからも一層努力して参りますので、今後ともご指導・ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

末筆になりますが、太玄会の益々のご発展とともに、太玄会の諸先生方、会員の皆様のご健康とご多幸を心よりお祈り申し上げます。

師との想い出



第六十三回太玄会書展 太玄大賞受賞

研友社 大木 曉 峰

私の卒園した幼稚園に習字教室が始まった。小学一年生の私は、親の言うままに教室に入会した。指導者は梶野曉涙先生、当時まだ二十代であった。私の手を取り一緒に半紙に書いたこと、慣れた教室（幼稚園）ですので、書くより遊びに夢中だったこと、この原稿を書くにあたり当時のことを大変懐かしく思い出しております。そうした調子で小学時代が終わわり中学に入ると、部活動等忙しくなり退会しました。社会人となつてから、何か趣味でもと思い、小学時代にお世話になつた習字教室（幼稚園）に再び訪ねると、そこには小学時代に記憶していた先生そのままの姿があり、先生にまた教えて下さいとお願いし、半紙に楷書一枚行書一枚、お手本を目の前で書いて頂き、家での練習が始まりました。小学時代の競書誌と、近年始まつた研友誌と両方に出示してもらい毎月の成績が気になり、進級して行くのが嬉しくて、書が好きになつている自分がいました。一級に昇級になつた頃、九成宮醴泉銘（歐陽詢）、孔子廟堂碑（虞世南）、蘭亭序（王羲之）、これらの法帖を渡され、「よく見て書き、勉強する様に」と、これが古典の始まりでした。研友社の師範試験に挑戦するまで、順調に來た。しか

し二度も試験に失敗、先生からは「蘭亭が書けていない、書き込みが足りない」と、ひと言。その後一年かけ蘭亭全臨を数十枚臨書したところ、先生のお手伝いで、お手本書きや添削していた数年後、第四十六回太玄会書展で太玄賞を頂くまでになりました。その作品の前で曉涙先生から、この作品の良い所はどこですか、直したい所は？と質問され、墨量が足りない箇所がありますと答えると、良いも悪いも自分で解らないといけない。一番印象に残る言葉は「師匠はいなくてもいい。それは古典があるから」と言っていた曉涙先生が平成二十六年に亡くなられ、稽古の場を欠った私は、研友社の年二回ある錬成会で田中鳳柳先生に指導して頂く様になりました。

鳳柳先生からは、「もっと自由に書けるだろう」と私におっしゃいましたが、今でもその言葉の意味がよく解っていません。いよいよ『古典を師に』との思いが強く感じられる昨今です。

編集後記

この約三年間は、コロナ禍の行動制限がある中で第六十二、六十三回展が開催されました。作品解説や席上揮毫も余儀なく中止となり、授賞式も制限の中で実施されましたが、現在は少しずつですが制限も解除され、通常の生活に戻りつつあります。

おそらく各団体のお稽古も通信添削等で直接指導もままならない中、それでも私たちは作品制作に打ち込んできました。全て自分で制作することの孤独さを感じられた方もいらっしゃるかもしれませんが。しかし、本来、作品制作は一人ひとりの生き様を昇華して表現するものであり、芸術の世界の崇高さや奥深さを痛感することができたのもこの期間ではなかったかと思っています。

また、このたび研友社の田中鳳柳先生が二〇二一（令和三年）十一月に八十九歳で他界されました。長年、太玄会を支えてこられた功績は言葉に尽くせません。太玄会の他の団体のメンバーにも気さくに声をかけていただき、古典を学ぶことの大切さを常に説かれていました。西新井のご自宅にも何度か伺わせていただき、拓本や書跡を拝見する機会を得ることが出来ましたことは何よりも貴重な体験でした。心よりご冥福をお祈りいたします。太玄会の未来を切り開くのは、私たち一人ひとりの自覚と作品制作にかかっていると思います。第六十五回、七十回とこれからの特色ある十五団体が力を合わせて活躍していくことこそ、先達の先生方へのご恩返しかと思います。

これからも皆様と一緒にさらなる発展に向けて躍進していきましょう。

令和5年4月

広報部長 荒井湧山

令和五年四月発行

太玄会会報 第77号

発行者 太 玄 会

編集者 太玄会事務局広報部

制作 (株)風雅プランニング